

ティルズオブベルセリ ア 自由の代償

カウボーイ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

遙か太古の昔、この世界から穢れをなくすために世界を救おうしたものがいた。彼は
人々から導師と呼ばれ、救世主として平和を掴もうとした。しかし、その時代に一人の
女性がかの者のもとに立ち塞がつた。彼女は世界から災禍の顕主と呼ばれ、災厄の始ま
りを生み出した者だつた。しかし、世界から忌み嫌われてもその女性を愛し続けた男が
いた。その男の名はカイン。これはそんな彼の物語。

目

次

第1章 閻の世界

プロローグ

11話

12話

13話

14話

第2章 地上世界ウェイスランド

15話

166

148 139 128 115

10話

9話

8話

7話

6話

5話

4話

3話

オリ主紹介

2話

1話

98

79

70

61

55

47

31

23

20

10

1

プロローグ

1話

7年前のあの日、世界が赤く染まつた。

空も大地も森も家も人も何もかもが。

その日何人もの野党が村を襲つたのだ。野党は家に火をはなち、村の人々を何人も切り裂き、焼き払つた。

そう、まるで地獄のようだつた。

そこから息をきらせながら森をかけぬけていく若い男とまだ幼い3人の少年少女が村から離れようと逃げていた。

「くっ！・・・・奴らはすでに業魔に・・・・！」

男は歯噛みしながらそう呟いていた。男は奴等がただの野党達ではないと知つているようだつたが今は、少年は少女ともう一人の幼い少年のことを自分が守らなければとただそれだけを考えるようにして いた。

とそのとき二人は途中で転んでしまう。

「ベル！ラフィ！」

少年はすぐに少女ともう一人の少年——ベルベットとライフィセットのそばに行つた。前を走つていた男も3人の所に駆け寄つた。

「カイン！・こつちだ！」

男は二人を抱き抱え、大きな空洞のできた木の陰に隠した。少年——カインと呼ばれた少年もすぐに男の側に走つていった。

「3人ともここに隠れろ、俺はセリカを助けに行く」

「こ、こわいよ……アーサー義兄さん……」

アーサーと呼ばれた男は優しく微笑むと、近くにあつたりんごを拾つた。
「これを持っていれば大丈夫だ。」

拾つたりんごをベルベットに手渡した。

「セリカが魔法をかけてくれた”生きる勇気をくれるりんごだ”

「本当？」

ベルベットは心配そうにアーサーにたずねた。

「本当さ、俺が嘘をついたことがあるか？」

ベルベットは首を横にふつた。

アーサーはカインとライフィセットにもりんごを渡すした。

「セリカを助けたら迎えにくる」

ライフィセットはアーサー胸のなかにかけよると、アーサーは優しく抱き寄せた。

「カイン、二人を頼んだぞ。お前が一人を守つてやるんだ」

アーサーはカインの目をみてそうつげた。

「うん、分かつた。俺が一人を守るよ」

カインは力強くそう答えた。

「いいか、怖くても挫けるな。なにがあつてもあきらめるじゃないぞ」

ライフィセットを抱きながらカインとベルベットに答えた。

ベルベットとカインはアーサーの言葉に勇気をもらい、怖い気持ちを押さえ込んだ。

「うん、あきらめないよ。あたしはラフィのお姉ちやんで、義兄さんの弟子でカインの友達だもん」

「俺も絶対にあきらめないよ。一人はなにがあつても俺が守るから、兄さんもセリカ義姉さんと一緒に戻ってきてね」

二人はアーサーに力強くそう答えると、アーサーは安心したように微笑むと、ライフィセットをおろし、セリカのもとに走つていった。

それから3人は木の陰に息を殺してずっと隠れていた。
ベルベットはライフィセツトを怖がらせないよう、抱き寄せ、カインは二人の前に隠すように座つていた。

「ねえ、カイ」

ベルベットは怖い気持ちを必死におし殺して、カインに喋りかけた。

「何？ ベル？」

「義兄さんとお姉ちゃん……大丈夫かな？」

ベルベットはアーサーの前では強がつていたがやはり二人のことが心配のようだつた。

「大丈夫さ、義兄さんは俺達の師匠なんだぞ。きっと義姉さんを助けて帰つてくるさ」「そう……だよね……」

カインはベルベットにはそう言つたがやはり自分も心配だつた。カインは必死に自分の心にいいきかせた。

大丈夫、義兄さんと義姉さんはきっと帰つてくる。
大丈夫。きっと大丈夫なはずだ。

「きやあああー！」

そんなことを考へていると森に女性の悲鳴が響きわたつた。

それは聞き間違えようがない。セリカ義姉さんのものだつた。

「セリカお姉ちゃん!」

ベルベットは悲鳴に気づくと、木の陰から出ていつてしまつた。

「ベル!」

カインはライフィセットと一緒にベルを追いかけ、森の道にでると、目の前に光がさしこんだ。

「なん・・だ・・あれ・・・?」

それはまるで黄金の龍のようだつた。その龍はとても大きく、森の方向——アーサー義兄さんが走つていつた方角から現れた。下から勢いよく空へ上つていつた龍はしばらくその長い尾は続いていた。

「うつ・・・!」

突然胸の奥が熱くなるのを感じたカインが胸を押さえつけて苦しみだした。

「カイン! 大丈夫!」

ベルベットが心配そうに、カインの側に駆け寄つた。

(何だこれ・・・!? 熱い・・・!?)

突然の異変に混乱しているとき、背後からうめき声がした。

「うぐぐ……！」

背後を見ると、男が森から苦しみながら飛び出してきた。男は頭をおさえながらどんどん苦しみだし、体がまるで狼男のような姿に変貌してしまった。

「きやあああ！」

ベルベットとライフィセットが悲鳴をあげると、カインはとつさに二人の手を掴んだ。

「二人ともこつち！」

カインは二人の手を引っ張り急いであの狼男から逃げた。

3人は必死に逃げた。がむしゃら逃げて、気がついたら、森をぬけていた。そしてその先にいたのは

「アーサー義兄さん！」

ベルベットはアーサーの名を叫ぶ。カインも安堵の表情を浮かべ、3人と一緒にアーサーのもとに走つていった。

だがそこにはセリカ義姉さんの姿はなく、アーサーの表情は今まで見たことがないくらいに、冷たい目をしていて

ライフィセツトの体を剣で貫く瞬間だつた。

「はっ!?

ずいぶん昔の夢をみていた。

そう、とてもとても昔の夢を。

友達を失い、義弟を失い、皆を失つたあの日から俺の世界が変わつた。

「ぐるるる・・・!」

そこは地獄のようだつた。いや、実際地獄なのかもしれない。空も大地も真つ赤に染まり、草木は荒れ果て、化け物どもが蠢くこの世界。ここに墮ちてどれくらいたつたのかもうわからない。今もこうして化け物どもに囲まれている状況も何度も経験した。

「があああ！」

化け物どものうちの一匹——狼男のような——が飛びかかつてくると、てにもつてている剣で化け物を切り裂いた。

上と下が真つ二つになつた化け物はそのまま地面に転げ落ち、地面に溶けていった。

青年——カインが持つてている剣はこの世界とは不釣り合いのような剣だつた。柄が青く刃は黄金に輝いており、まるで聖剣のような見た目だつた。

青年は飛びかかつてくる化け物どもを紙一重でかわしながら、そのまま切り伏せていつた。

そして、一瞬にして化け物を全滅させてしまつた。

しかし、闇の中から新たに何十という化け物が出現し、カインの周りを再び囲んでしまつた。

そんな絶望的な状況にも関わらず、カインは不適に笑い化け物どもを嘲笑うかのようにいつた。

「こいよ……化け物ども……！」

カインは剣を両手で構え、その切つ先を化け物に向けていいはなつた。

「俺はなんとしても元の世界に帰り……！どうしても会いたいやつがいるんだ……」

!!

こんな状況でもカインはまったくあきらめてはいなかつた。彼の思いを繋いでいるのはたつた一人の女の存在だつた。

「そこを……どけ!!」

——ベルベット・クラウ——彼が置いてきてしまつた、守ると誓つた愛する人。

——彼女にもう一度会うために、彼はあがき続ける——

2
話

—7年後—

「ふう、これで薪割りは全部？アーサー義兄さん」

気持ちのいい太陽の下で薪割りをしていた少年——カインは自身が慕う義兄——アーサーに尋ねた。

「ああ、これで全部だ。すまなかつたな手伝つてもらつて」

アーサーは申し訳なさそうにいつた。別段アーサー一人でも十分こなせたのだが、カインが一人でやらせるわけにはいかないといって、手伝つていたのだ。

「いいよ、無理いつて手伝つたのは俺だし、それにこれも修行の一環だしな」

「そうだな。ありがとう、カイン」

アーサーはカインに礼をいうと、薪を片付け始めた。
カインも急いで薪をまとめ始めた。

「しかし、そんなに修行がしたいなら、今度の修行メニューはもっと増やしておくとしょ
うか、薪割りじやあ物足りないだろ」
「お、おう！ 望むところだ！」

カインは少し修行メニューが多くなることを聞いて怯むが、すぐに胸をはつて答えた。

「俺もいつか、アーサー義兄さんみたいに強くなりたいからな。どんどん来てくれて構わないぜ！」

「そうか、いつておくが俺のようになるにはそう甘くはないぞ？」

アーサーは微笑みながらカインを試すように言つた。

「わかつてるよ、そのための修行だろ？」

「ああ、そうだな」

すると、アーサーが急に片付けの手を止め、カインと向き合い、いつになく真剣な表情をした。

「カイン」

「何？ 義兄さん？」

カインはアーサーの真剣な表情を見て、何か感じたのか、カインもアーサーの言葉にしつかり耳を傾けた。

「なぜ鳥は、空を飛ぶのだと思う？」

一見したら変な質問に聞こえるが、カインにはなぜかアーサーが自分を試しているようを感じた。でも、例え自分を試していたとしてもこの質問の答えは自分の中で決まつ

ていた。

「そんなの、決まってるよ」

カインはハッキリと答えた。

「鳥が飛ぶのは——」

アーサーがその答えを聞くと目を細めながら、カインの目を見据えていた。その目はあの日と同じ目だった。

「それが……お前の答えか?」

カインはアーサーのその目に恐れを感じたが、怯むことなくカインもまたアーサーの目を見て答えた。

「ああ、そうだ」

するとアーサーはすぐにいつもの優しい表情を見せると微笑みながら、カインの頭をポンポンと撫でた。

「実にお前らしい答えだな、納得だよ」

カインは照れくさそうに頬を赤らめた。

「や、やめろって、もう子どもじゃないんだから」

アーサーは笑いながら手をどけた。

「アルトリウス様」

すると突然仮面を着けた赤い髪を肩の辺りまで伸びて いる女性が現れた。

ちなみにアルトリウスとはアーサーの本名で、アーサーは略称で皆が呼んでいた。

「あつ、シアリーズ」

シアリーズと呼ばれた女性は、聖隸と呼ばれる存在で、聖隸術と呼ばれる特別な力を扱うことのできる種族である。かつて、聖隸は特別な人にしか存在を認識することができなかつたが、7年前の「開門の日」以来、普通の人にも聖隸を認識できるようになつた。カインも「開門の日」から見えるようになった人の一人である。

「どうした、シアリーズ？」

「アルトリウス様、少々お話を」

どうやら二人で話したいことがあるらしい。自分は邪魔のようだつた。

「じゃあ、俺先に家に戻るよ。」

「すまんな、すぐに戻るよ」

アーサーとカインはそこで別れ、カインは先に家に戻つて言つた。

(やつぱり、義兄さんつて対魔士なんだよなあ)

対魔士とは、聖隸を従え、その力を使い今世界に蔓延している業魔病と戦う者達のこと

とである。7年前の「開門の日」から人々に靈應力という聖隸や業魔を認識できる力が強まつたことでその数が増えたという話は聞いていた。自分もその力を身に付いてしまつた者の一人だから、自分も対魔士になるべきなのか、考えていた。

「義兄さんみたいに強くなるには、やっぱりそうなるべきなのか？」

対魔士になれば、ベルやラフィを守ることができるものとは違う気がする。
自分がなりたいものとは違う気がする。

「まあ、先のことは後で考えるか」

そんなことを考えていたら、家に着いてしまつっていた。

「たつだいまー！」

カインが能天気な声で家に入ると、台所で料理をしていた少女がカインを思い切り睨んだ。その少女は長い腰の辺りまである綺麗な黒髪を結び、金色の瞳をした整つた顔立ちの少女だった。

「カイ、うつさい」

「帰つて来て第一声がそれかよ」

帰つてくるなり、罵声をあびせるとは酷い幼馴染である。彼女の名前はベルベット・クラウ。カインの幼馴染もある。

「薪割りもう終わつたの？」

「ああ、一冬分やつておいた」

「ありがと、義兄さんは？」

「なんか用事があるみたい、ライフィセットは？」

「まだ寝てる、そろそろ起こさないと」

「朝ご飯はもうできたのか？」

「今終わつたとこよ」

どうやら、スープとお粥を作つていたらしい。お粥は多分ライフィセットに食べさせるためなんだろうな。

台所を片付けたあと、ライフィセットのいる部屋へ向かつた。

「起きて、ラフィ。朝だよ」

「う・・・うん・・・」

ラフィと呼ばれた少年、ライフィセットが眠たそうにベッドから起き上がりつた。ライフィセットはベルベットの弟でカインやアーサーにとつても実の弟のような存在だつた。「もう、ラフィつて呼ぶのやめてつてば。子どもっぽい・・・」

「そうだぞ、ベルは男心がわかつてないからなあ、なあライフィセット」

「あ、カインお義兄ちゃん。おはよう」

「ああ、おはようさん」

「何よ、二人して文句ばっかり」

そういうとベルベットはライフィセットの額に自分の額を優しく押し付けた。

「……ちょっと熱があるわね。今日は、おとなしく寝てなさい。丁度新しい薬が届く日だし」

ベルベットはライフィセットの頭をポンポンと撫でると、ライフィセットつまらなさそうに言つた。

「え？ 僕、岬に行くつもりだったのに」

ベルベットは人差し指を上に立てながら

「だめ、今日は我慢」

「そうだぞ、あまり無理しないで家で安静にしてろ」

ベルベットとカインがライフィセットに体を酷使させないよう言い聞かせようとすると、ライフィセットはそれでも何かしたいらしく

「本くらいよんでも……」

ベルベットはそれでもだめと口に出すまでもなく、ライフィセットを黙らせた。そんな様子をカインはやれやれと言わんばかりの様子でみていた。

するとアーサーがかえってきたらしく、玄関が開く音がした。

「ベルベットとカインを困らせるな、ライフィセット」

「そんなつもり……」

アーサーはライフィセットなだめるように言つた。

「義兄さん、話終わつたのか？」

「ああ、だが、出掛ける用ができてしまつてな。薬の代金は、少し待つてもらつてくれ」
ベルベットがアーサーのちかくまでかけよると

「なら、あたしが稼いでくるよ。ウリボアを何匹か狩れば、薬と交換できるでしょ」

ベルベットが自信満々で答えた。

「お前一人でか？」

するとカインが右手をあげて

「俺も行くよ、丁度腕も鈍つてたし」

「えへ、あたしだけで十分よ」

ベルベットがついてくるなど言わんばかりの目をしている。アーサーにいいとこ見
せようとしているな。だが

「アーサーの戦訓その一！『策戦は堅実に。対応は柔軟に』だろ、一人より二人のほうが
効率がいいしな」

「あ！それあたしが言おうとしてたのに！」

ベルベットが頬を膨らませながらこちらを睨んできた。

一日何回睨んでくるんだこいつは。

「わかつた。弟子達の腕を信じるとするか。すまんが一人とも、頼む」「ごめんね、お義兄ちゃん、お姉ちゃん」

自分のせいで二人に無理をさせているようで、申し訳なさそうにライフィセットが言つた。

「ゴメンもスマンもなし！家族なんだから当然でしょ、ね！」

「そようそ、思い切り頼りにしてくれいいんだぞ！」

二人は当然のようにライフィセットに答えた。本当の家族ならこれくらいあたりまえなのだろう。

「では、行つてくる」

そういうつて、アーサーは出掛けていつた。シアリーズと何処か行くのだろうか。カインはそんなことを考えていた。

「お粥をつくつてあるから、食べてね。夕方前に戻るから」

「わかつた。氣をつけてね、お姉ちゃん、お義兄ちゃん」

「おう！じやあ行つてきます！」

カインがライフィセット元気よく行つてきますのあいさつをし、ベルベットとともにウリボア狩りに向かつた。

ライフィセツトに早く元気になつてもらうために、薬を届けなくては。

オリ主紹介

カイン・クラウ

男性／初登場時16歳／武器：長剣／戦闘タイプ：聖剣使い／種族：人間

本作の主人公。

明るく活発な少年で、どんな時も諦めない不屈の精神力の持ち主。容姿は、髪は灰色でさかだつたツンツンした髪型をしている。目は透き通るような青色で顔立ちも整つており、村の間では美少年と言われている。

10年前に森で傷だらけのところを、まだ幼かつたベルベットに助けてもらい、その時点では名前以外の記憶を失っていた。行く宛のないカインをセリカが快く自分達の家においてもらい、それ以来クラウ家の一員となり、カインもそのことについて多大な恩を感じている。

アーサーの一番弟子を自称しており、実際剣の腕もかなりのものである。アーサーと同じタイプの剣士ではあるが、戦い方はアーサーに教えてもらつたというより、体が戦い方を知つており、稽古をしてもらつている時に自然と体が動いていた。

森で倒れていたとき、一緒に長剣をてにしており、それがカインにとつて名前以外の唯一の記憶の手がかりであり、自身の武器でもあつた。カインが持つ剣は聖剣のような特徴をしており、（見た目は f a t e のエクスカリバー）剣に靈力を込めると刃が黄金に輝き、とてもない威力を持ち、剣に込められた靈力を放出して攻撃することもできる。だが、かなり燃費が悪く、初めは靈力をこめただけでもかなり疲労が激しかつた。

”穢れ”を浄化することもでき、業魔になつた者を元に戻すことも可能で、意志を封じられた聖隸を解放する特殊な力も宿している。剣の力はカインにしか扱うことができない。普段剣はカインの体の中に宿しており、念じると剣が手元に出現し、いつでも出し入れすることができる。

ベルベットに好意を抱いており、子どものころ命を救つてもらい、それ以来ずっと思いを寄せている。

アーサーやセリカのこともとても慕つており、自分を家族にむかえてくれた二人にずっと感謝している。アーサーのことも義兄としても師としても尊敬しており、いつか義兄のように強くありたいと思っている。

ライフィセットのこともとても大切に思つており、実の弟のようにせつしている。ライフィセットと共にいるとライフィセットと誰かを重ねているような錯覚におそわれ、自分にも弟がいたのではないかと感じている。

聖隸達と何らかの繋がりが存在しており、ゼンライとカステイエルはカインのことを知つているようだつたが、未だ不明。

潜在的にとてもない靈応力を有しており、本来なら子どもの頃から聖隸や業魔が見えていたはずだが、何故か見えていなかつた。「開門の日」に見えるようになつたが、それでも完全ではなく、「降臨の日」によつてカインの力は完全に目覚めた。

カインの力は人為的に封印されていた形跡が見られ、カステイエルによると、「開門の日」によつて中途半端に封印が解かれ、「降臨の日」が最後に封印を解除するきっかけになつたらしい。

3
話

「ウリボアの狩場つて”鎮めの森”だっけ？」

「ええ、村の外にある場所ね」

家を出た二人はお互に狩場の場所を確認した。

「ラフィの薬のため……気合い入れないと！」

ベルベットはライフィセツトのためにかなりやる気満々のようでとても張り切っていた。

「やる気はあるのはいいが、せめてグミは買つていこうぜ、そのまま気合い入れすぎてぶつ倒れないようにな」

「わ、わかってるわよ、そんなこと」

そんなやりとりをしながら二人はグミを買いに村にあるお店に向かつた。

「じゃあ俺、グミ買つてくるから。ここで待つてくれ」

「うん、わかった」

カインは一旦ベルベットとわかれ、近くにあるお店に向かつた。

「おじさん、グミちょうどいい」

「おつ！カイン！よく来たな。何個くらいだ？」

「2個ちょうどいい」

お店のおじさんがグミを渡すと、カインも手持ちのお金おじさんに渡した。

「にしても相変わらずお熱いね、二人でデートか？」

おじさんがニタリ顔でこちらをからかってきました。この人は毎回毎回俺とベルベットのことでからかってくるな。

「残念ながら、デートじゃなくてウリボア狩り。これから森に行くんだ」

「なんでえ、そうなのか。でも一人つきりってのは変わらないんだろう？頑張れよ！少年！」

「はいはい、おじさんに言われるまでもねえよ」

おじさんとの会話を終えるとすぐにベルベットのもとに向かっていった。

「・・・セリカ姉さんが死んでよかつたっていうの？そんなはずないでしょ！」

するとベルベットの怒鳴り声が聞こえてきた。急いでベルベットの側に行くと、近所の夫婦とはなっていたようだつた。

「どうした？ベル？」

「・・・カイン」

ベルベットの顔がこちらを向き、目に涙を浮かべていた。

「なにがあつたんだ?」

近所の奥さんに事情を聞いた。

「この人が無神経なこといつたせいだよ、まつたくバカだねえ。ごめんよ、ベルベット」

「すまん、例え話のつもりだつたんだ」

二人がベルベットに謝るとベルベットも別に大丈夫といつて、二人はその場で夫婦と別れた。

しばらく、ベルベットが暗い顔して落ち込んでいると、カインがベルベットの頭を撫でながら

「義姉さんが死んでよかつたなんてこと絶対ありえないから、安心しろ」と
するとベルベットが、下を向きながらカインに礼をいった。

「うん、ありがとう。カイ」

「おう」

鎮めの森に入るところなことをベルベットが聞いてきた。

「そういえば、アーサー義兄さん、最近夕飯に『あれを食べたい』ってリクエストしなく

なつたわよね?』

「ああ、確かに。いつもセリカ義姉さん直伝の献立メニューを頼んでいたのにな。」

「いろいろ物騒になつたせいで、村に駆り出されてるせいで疲れてるのかな?』

「ううんと二人が考えてると、ベルベットが何か思い付いたように人差し指を立てて
「・・・よし。今晚はセリカ義姉さん直伝の『ウリボアの肉たっぷり、なのにさっぱり
シチュー』にしよう!』

ベルベットがそう言うと、カインが大喜びでガツツポーズをした。

「マジ!? やつたーー! きっとアーサー義兄さん喜ぶぞ! 僕も大好物だからな』

「じゃあ帰つたら沢山作るわね、そこまで喜ばれると腕がなるわね』

二人はウリボアのいる森に入るなりそんなことを話ながら進んでいた。
するとさつそくウリボアが数匹いるのを見つけた。

「ウリボアみつけ!』

ベルベットがウリボアに飛びかかり、腕に仕込んでいた刺突刃でウリボアに切り込んだ。一撃でウリボアは倒され、他のウリボアがベルベットに真横から突撃してくるが、ベルベットはそれをなんなくかわし、その勢いで蹴りを食らわせた。ウリボアが怯んだ隙に、刺突刃で止めをさした。

「よおし! この調子で狩りまくるわよ!』

などと調子にのつていると、背後から別のウリボアが勢いよく突撃し、反応に遅れたベルベットは慌てて振り向くと、そこには剣を構えたカインがおり、突撃してきたウリボアを横一文字に切り裂いた。

「油断大敵だぞ、ベル」

「あはは、ごめん、ありがとう」

ベルベットは苦笑いでカインに礼をいうと二人は次のウリボアを探しにいった。

「いつ見ても不思議よね、アンタの剣って」

ベルベットがカインの剣を不思議そうにみながら言つた。

「うん？ ああこれ？ まあ俺もよくわかつてないしなあ。 ただなんとなく使つてただけだし」

カイン自身自分の剣を大雑把にしか把握しておらず、ほとんど勘で使つてるようなものだつた。

「なんとなくつて……じゃあなんとなくで何もないところから剣をだしたり、変な光りとかだしてるわけ？」

ベルベットが少々呆れ気味に答えた。そんな感覚でどうやつて使つてるのか、不思議でならなかつた。

「まあ、そうだな」

「あつ、そう」

「これ以上剣の話をしても仕方ないと思い、剣から話題を変えた。

「そういえば、カイってアーサー義兄さんと同じで靈應力？っていうのがあるのよね？」
「ああ」

「じゃあ、カイは対魔士にならないの？」

カインはあの「開門の日」以来アーサーと同じように聖隸や業魔が見えていた。その時期からアーサーに教えをこい、カインの持つ剣も使いこなせるようになり、ほとんど対魔士に近い力を身に付けていた。

そこまでの才能がありながらなぜ対魔士にならないのか、ずっと疑問を抱いていた。「対魔士になろうかと考えた時期も確かにあつたんだ。でも、対魔士は俺のなりたいものとは違うと思って」

「じゃあ何になりたいの？」

するとカインが歩んでいた足を止めて、ベルベットと向かい合った。

「俺はただ・・・・ラフィやベル・・家族を守れるような男になりたいんだ」「カイ・・・・」

ベルベットは少し驚いた表情をした。カインがそんなことを考えていたなんて、思つ

「ていなかつたからだ。

「そして、俺が家族を守れるようになつたらさ……俺とベルベットとライフィセット、そしてアーサー義兄さんと世界中を旅してみたいんだ」

カインが何処までも続く空をみながら、答えた。

「ライフィセットの体もよくなつて、俺がもつともつと強くなつたらさ、世界中何処にいつても安心だろ?」

ベルベットは子どものように言うカインを見て、微笑むと

「……ラフィも……同じこと言つてた……」

「俺みたいに強くなりたいって?」

「違うわよ、世界中を旅して回るつて話」

カインはそのことを聞いて、あまり驚いた反応を見せず、そつかとだけつぶやいた。

「あんまり驚かないのね」

ベルベットは少し意外そうに言つた。

「まあ、あんな立派な地図を作つてたらそだらうなつて思つてさ」

ライフィセットの部屋には未完成ではあるが、自作の地図を作つており、他にも古代語や歴史の本など難しい本などが沢山あつたので、大体予想はできた。

「……俺もライフィセットも自由に憧れているのかもしれないなあ……」

とカインがポツンとそんなことを呟いていたがベルベットにはあまり聞こえていなかつたようだ。

「自由?」

カインはすぐになんでもないといつて再び歩きだした。

するとベルベットは去っていくカインの背中を見ながら、自分もこのまま置いていかれるのはイヤだとふと思つた。

「カイ!」

気がつくとカインに向かつて名前を呼んでいた。カインは自分の方に振り向き目をあわせながら言つた。

「あたしだって!アーサー義兄さんの弟子なんだから!守られるだけじやないわよ!」

カインは少し驚いた表情になると優しく微笑みベルベットに向かつて答えた。

「じゃあ、俺より強くなつてみせろよ!なれるもんならな!」

ベルベットは自信満々の笑顔で、自分の拳をカインに向け答えた。

「望むところ!」

そう言つたあと走つてカインの背中を追いかけていった。

4
話

二人は森の外れにある、岬の祠に来ていた。ウリボアを探していたらいつの間にかこんな場所まで来ていた。

カインはこの場所があまり好きではなかつた。
この祠にあるそこが見えない穴がとても恐ろしいものに見えて、あまり近寄りたくないかつたのだ。

それに、ここに来るはどうしてもあの日を思い出す。

一面に広がる真っ赤な世界、そしてそこにいたあの冷たい目をしたアーサー義兄さんのことを。

「危ないわね。また崩れて穴が広がつてゐる」

ベルベットの言葉にはつとなつたカインはすぐに意識を
ベルベットの言葉に向けた。

「ここ柵とか作つたほうがいいんじやないか?」

もつともなことをカインが言つた。確かに少し足を滑らせたらそのまま落ちてしま

いそなくらいなにもなく、ここに誰か来たら危なそうだ。

「あたしだつて何回もいったのよ？けど、『触れちゃいけない場所たから』つて
「・・・・触れちゃいけない場所・・・・」

確かにここにくるといつも思う。なにか嫌な感じかするようなそんな気分にさせる
場所だと。

「セリカお姉ちゃんにも、よく脅かされたつけ。『ここは地獄に繋がってるのよ』・・・つ
て」

「そういえばそんなこといつていたな。

「そんなこと信じるほど、もう子どもじゃないけど！」

ベルベットが心なしか少し怖がつた口調でそう言つた。

「本当か？昔は怖がつて俺の手をガツチリ握つてたくせに」

カインはからかうようにイタズラっぽい口調でベルベットに言つた。

（昔は、夜寝る時も俺とベルベットとライフィセットの三人でよく寝てたつけ。）

カインが昔のことを懐かしんでいると、ベルベットが頬を赤らめながら必死に反論し
た。

「あ、あれはあんたやラフィイが恐い思いをしないように手を握つてやつていたのよ！」「
のわりには毎日トイレに・・・・」

「わー！」

カインがベルベットの恥ずかしい過去を話そようとすると必死にベルベットがカインの口を手で覆いながら止めた。

「もうつ！ウリボアも十分狩ったし、早く村へ戻るわよ！」

ベルベットは少し怒り気味で言うと、そっぽを向いてずんずんと先に村の方へ戻つていった。

カインはそんなベルベットをみながら、おかしく笑い、ベルベットのあとについていった。

そのとき—

「？」

刺すような不気味な視線がカインを襲つた。

(・・・・何だ？この気配は？・・・・)

周囲を見渡してみても、人影はなく、誰もいなかつた。

(・・・・氣のせいなのか？誰かに見られてる気がしたんだが)

考え込んでいると、ベルベットがカインの様子が変なことに気がつき、歩みを止めてこちらを心配そうに見ていた。

「どうしたの？大丈夫？」

ベルベットの声にカインが反応し、大丈夫だと心配をかけないように言つた。

「そう？なら早く村へ戻りましょ。ラフィイが待つてるわ」

「ああ、今行く」

再びカインが周囲の気配を探つたが、謎の視線は感じられなかつた。

（やつぱり、考えすぎか）

カインは安心すると再びベルベットのあとについていつた。

ロープの男がこちらをじつと見ていたことに気づかずに。

ベルベットと一緒に村へ戻る途中、ウリボアの群れが敵意をむき出してこちらに迫つてきた。

「あんたたち、もしかしてあたしたちが狩つたウリボアの……！」

どうやら自分たちが狩つたウリボアの子どものようだつた。

だが、自分たちも生きるためにウリボアを狩つた。それにこちらを襲うというなら、戦うしかなかつた。

「……ベルベット」

「……わかってる」

ベルベットも覚悟をきめ、ウリボアに向けて構えた。

「……戦訓その三『剣を抜いたら迷うな、非常の戦いは非情をもつて制すべし』！」

「これも俺達が生きるためだ！ 行くぞ！」

ベルベットとカインはウリボアの群れへ切りかかつた。

ベルベットは得意の蹴りでウリボアを翻弄し、止めの刺突刃で仕留めていき、カインはウリボアの攻撃を紙一重で交わしながら、カウンターをしけけ一刀ので切り伏せていた。

ベルベットが最後の一匹を仕留め、ウリボアは全滅した。

「やつた！」

ベルベットが最後の一匹を仕留めて安堵したのか、警戒をといた瞬間だつた。

「！ベルベット！」

仕留めたはずのウリボアの一匹が起き上がると、ベルベットに飛びかかつたのだ。ベルベットは反応できず、体が動けなかつた。

（くそつ！間に合わない！）

カインも咄嗟のことに対応できず、ベルベットがウリボアにやられると思つた瞬間だつた。

「シアリーズ」

火の玉がウリボアに直撃し、ウリボアはそのまま地面に落ち、動かなくなつた。

「これは、まさか・・・」

「対魔士の技！」

さつきの火の玉は聖隸が使う聖隸術の力だつた。

この力を扱える人といえばこの近くには一人しかいない。

「自負と不安。敵への同情。勝利への歓喜――」

聞き覚えのある声のする方向に振り向くと、そこには長剣を持った、アーサーが立つていた。

「お前たちは、感情が豊かすぎる。それでは、いつか破滅するぞ」

「……」

「……でも、アーサー義兄さん！」

ベルベットがアーサーの言葉に落ち込み、カインが反論しようとすると、アーサーの側にいたシアリーズがカインが答える前に言つた。

「ですが、その感情が彼らの優しさに繋がつてるともいえます」

「ああ。それがこの子たちの長所でもある」

「え？」

ベルベットにはシアリーズが見えないため二人の会話は聞こえてないようだ。
「そのおかげでこの二人が強くなっているのも事実です」

「わかってるさ。だが、それでは――」

アーサーがいいかけると、長剣の柄の先に結ばれている2枚の鳥の羽根がクロスした形のペンドントが吊るされており、それをどこか悲しい目で見つめていた。

「義兄さん？」

ベルベットが心配そうに声をかけると、アーサーが二人の顔を見て答えた。

「アーサーの戦訓その四だよ。『勝利を確信しても油断するな』

「はい！」

二人はアーサーに元気よく返事をした。

「ともかく、これでライフィセットの薬代を払えるだろう」

ベルベットが後ろを振り返り、さつき倒したウリボア達を悲しい顔で見ていた。

(ベルベット……)

ベルベットは優しい少女だ。まだ非情になりきれない所もあるだろう。まあそれは自分にも言えることだが。

だがシアリーズもいつた通りそう言つた感情があるおかげで自分達は強くなれたわけだが。

「売る方のウリボアは、俺が先に店に届けておこう。」

アーサーがウリボアの死体に歩みよつた。

「先に?」

「アーサー義兄さん、用事でもあるのか?」

「会う予定だつた知人が遅れていてな。おそらく今夜は帰れない。それを伝えに来たんだ。薬はお前たちがうけとつてくれ」

「……うん」

「……わかった」

二人はアーサーが今夜帰れないと聞いて、少し落ち込んだ様子をみせ、暗い表情に

なつた。ベルベットが今夜はセリカ姉さんの特製メニューを駆走するつもりだつたのでよけいに残念な気持ちになつた。

「もうひとつ。村の近くで業魔の群れを見た」

「！業魔が！？」

カインが声をあらげ、ベルベットも驚いた表情をした。

「万が一、襲われたら迷わず逃げるんだ」

「ううん！業魔が来たつてあたしが！」

「業魔と戦えるのは、対魔士の力を持つ者だけだ」

アーサーがベルベットの言葉を遮るように強い口調で言つた。

「それが現実の”理”だ感情ではどうにもならない」

アーサーの言葉が胸につきささり、ベルベットは顔を地面にむけた。

「だが、カイン。お前には俺たちと同じ”力”がある」

アーサーがカインの方に目を合わせながら答えた。

「お前のその剣には業魔を祓う特別な力を有している。そしてその力を扱えるのはお前だけだ」

アーサーのその言葉を聞いてカインの表情に力が入つた。アーサーの言葉には強い責任がのつてゐるような強い言葉だつた。

「その時、皆を守れるのはお前しかいない」

「ああ、わかつてゐよアーサー義兄さん。だつて、それが俺がここにいる理由だから」
アーサーの目をみながら、そう言つたカインは覚悟を決めていた。

そうだ、あの時、ベルベットに助けてもらつたあの時から、守ると誓つたんだ。

「頼んだぞ、カイン」

アーサーはカインの肩に手をおくとそう言つた。

「あたしも……なれないのかな？ 対魔士に」

ベルベットが顔を上げるとアーサーに聞いてみた。

「ベルベット……それは……」

カインは言いかけて、やめた。対魔士になるには高い靈応力が必須でそれがなければ
対魔士にはなれないからだ。ベルベットには対魔士になれるほどの靈応力は有してな
かつた。

アーサーは顔を空に上げると、ベルベットに質問した。

「なぜ鳥は、空を飛ぶのだと思う？」

それは今朝、カインにも聞かれた質問だつた。

「…………それって……」

カインは驚いていたが、ベルベットは質問の意図がわからず不思議そうな顔をしてい

た。ベルベットは空を飛ぶ鳥を見上げた。

「なぜって……？ 飛ばないとエサを捕まえられないし……」

ベルベット至極当然のことを言つた。

(いや……多分義兄さんが聞きたいのは……もつと……)

カインはアーサーの質問の意図の全てはわからなかつたがなんとなく伝わつてはいた。

アーサーは少し黙ると、再び口を開いた。

「対魔士になるには特別な才能が必要なんだ。だが、それをもつた人間は、もうほとんどいない」

「……はい」

ベルベットは悲しい声でそう答えた。ベルベットは悔しかつた。アーサーやカインのような力があれば、ラフィイや皆を守ることができ、カインの隣に立つことができると思つたからだ。

カインはそんなベルベットを、見て自分まで悲しい気持ちになつてしまつっていた。

「明日はセリカたちの命日だ。なるべく早く戻るよ」

「うん。お姉ちゃん直伝のキツシユをつくつてまつてるから」

「アーサー義兄さん！ 帰つたらまた剣の稽古つけてくれよ！」

「ああ、約束するよ」

二人はアーサーの去つていくアーサーの背中を見ながら、そう言つた。

「あたし、足手まといなのかな」

ベルベットは村へ帰る途中そんなことを言つた。

「なんだよ、いきなり？」

「あたしは、アーサー義兄さんやあんたみたいに特別な力があるわけじゃない。さつき

だつてやられるところだつたし……」

ベルベットはさつきのことで相当落ち込んでいる様子だつた。自分に自信をなくし
始めているんだろう。

「……確かに俺やアーサー義兄さんができることはベルには出来ないかもしれないな」

ベルベットはその言葉にさらに落ち込んでしまい、暗い表情になつた。しかし、カイ
ンがそのまま言葉を続けて言つた。

「でも、俺やアーサー義兄さんに出来ないこと、ベルには出きるだろ」
カインは微笑みながら、ベルベットの顔をみながら言った。

「え？ あたしにしか出来ないこと？」

「ああ。例えばその身軽さとかさ、俺やアーサー義兄さんにはない武器だし、敵を翻弄するとかに使えるしな」

「でも、それは……」

ベルベットが言いかけて、カインがそのまま言葉を続ける。

「戦いだけじやないぜ。ベルが作つてくれる料理はすつごくうまいし、家事はなんなくこなす、少なくとも俺には出来ないことのことだな。そして、ベルのその明るい性格とか、ベルのその笑顔がなによりも俺の力になつてくれてる。それに対するごく助けてもらつてるだぜ、俺はもちろん、ライフィセツトやアーサー義兄さんもな」

ベルベットはカインのその言葉に頬を赤く染めながら聞いていた。それと同時に元気をカインに分けてもらつている感じがした。ベルベットは自分にもできることがあるということをカインの言葉を聞いて再確認した。

「それに……俺は、お前が側にいてくれたから強くなれたんだ」

「あたしが？」

「ああ、お前に助けてもらつたあの時から……俺は、お前を……お前達を守るつ

て誓つたんだ」

「カイ……」

二人は歩みを止めて、顔を向き合わせた。

なにやらこれはかなりいい雰囲気なのではないか？

そう感じたカインは今まで言えなかつた思いをぶつけることにした。

「だからさ……俺……あの時から……お前のことが……す——」

「ちよ、ちよつと待つて！」

ベルベットは顔を真つ赤にしながら手でカインの口を塞いだ。

「むぐっ!?」

「その、あの、えつと、そう！ 急いで村へ戻つて薬もらわないとお店しまつちやうかも
じやない!?」

ベルベットはカインの口から手を離すと、目をそらしながら慌てた感じに言つた。

「そう言うわけだから！ 急いで村へ戻ろう？ ね？」

「えつ？ いや、だから」

「じゃ！ あたし先にいつてるから

！」

ベルベットはそう言うと一瞬で村の方向に走っていき一瞬で見えなくなつた。

「ええ!? ちょっと…………何なんだよ…………」

一人取り残されたカインだつた。

「はあはあはあ…………まつたく…………まだ早すぎるわよ」

ベルベットはカインからしばらく離れたところで立ち止まり、息切れしながら休憩していた。

「…………そう…………あたしにはまだ早い…………」

ベルベットは少し落ち込んだ様子で立ち尽くしていた。

自分にはまだライフィセツトがいるし、自分が誰かと一緒になつたらライフィセツトが一人になるような気がして恐いのだ。それが例えカインでも。

「…………ごめんね…………カイ…………本当は…………あたしも」

罪悪感が薄れるまで
ベルベットはしばらくそこで立ち尽くしていた。

5 話

ベルベットはカインより一足先に村へ戻っていた。

(カイ・・・置いてきちやつたけど、大丈夫かな?)

ベルベットは森に置いてしまつたカインのことを考えていた。
カインがあの時言おうとしていた言葉、それがずっとベルベットの頭のなかにあつた。

(カイは、あたしのことが・・・)

カインが自分のことをそんな風に見てくれていたことが嬉しいという気持ちがベルベットにはあつた。

自分もカインと一緒に暮らしていく中で彼にたいする気持ちが変わつていくのを感じていた。

(あたしは・・・カイと・・・どうなりたいんだろ)

カインとはずつと家族として一緒に暮らしていたし、これからもずっと続くものだと思つていた。

けど、もしも私とカインがそう言う関係になつたらと思うと、今までのような家族に

はなれないかもしない。

そんな気持ちがしていた。

なにより、自分たちが一緒になつたら、ライフィセットはどうなるのだろう。自分が弟のそばを離れたらあの子に淋しい思いをさせてしまうのではないか。
それが一番の心配だった。

「・・・ベット・・・ベルベット！」

「うえ?! な、何?!」

などと考え込んでいると背後から自分を呼び掛ける声が聞こえたので、ベルベットはすつとんきような声をあげて振り向くと、そこには赤みがかかった茶髪をツインテールにした少女——ニコが立つていた。

「どうしたのよ? ボーっとして」

「う、ううん、なんでもない!」

ベルベットはあわてて首を横にふつた。

「ふくん」

「な、何よ」

するとニコは意地悪そうにこちらをみていた。

「もしかして、カインのこと考えてたでしょ」

「な、なんでわかつ……はつ！」

図星をつかれてついベルベットもなんでわかつたのかと口にだそうとし、あわてて両手で口を覆った。

「あはは！だつて分かりやすいんだもの。ベルベットは」
「うう……」

そんなに顔に出てただろうか。急に恥ずかしさが込み上げてきて、頬が熱くなるのを感じた。

「何かあつたの？カインと」

「うん、ちょっとね……」

「よかつたら、話、聞こうか？」

ニコが心配そうにベルベットに訪ねた。

ベルベットもまだ自分の気持ちの整理がついておらず、ニコにならどうすべきかがわかるかもしれない。

そう思いニコに何があつたか話すことにした。

「ふーん、そつか。カインが……」

「どうしたらしいと思う?」

「あんたはどうしたいの?」

「あたしは……あたしにはラフィイがいるし、あの子を一人になんてできない」
ベルベットは顔を俯きながら答えた。

「はああんたは、そんなことで悩んでたの?」

「そ、そんなことつて何よ!」

「だいたい、何であんたとカインが一緒になつたら、ライフィセツトが一人になるのよ

?

「だ、だつて、それは」

あたしがカインと一緒になつたら、きっとあたしはカインの側を離れなくなる。もし
そうなつたら、ラフィイの側にいられないかも知れない。そうベルベットは考へているの
だ。

「いい、ベルベット」

ニコはベルベットの両肩をグッとつかみ、ちゃんと目を見つめて言つた。

「あんたたちは家族。例えあんたとカインが一緒になつても離ればなれになるわけじや
ない。」

「ニコ……」

「それともあんたたち家族は、そんなことで壊れてしまうようなものだつたの？」

「そんなこと……！」

「でしょ？だから、きっと、大丈夫」

ニコは笑いながらそういつた。

「だから、あんたも自分に正直にね」

「うん……ありがとね……ニコ」

ベルベットは微笑みながら、ニコにお礼をいつた。

そうだ、あたしたち家族はそんなことで崩れたりしない、あたしもカイをラフイもアーサー義兄さんも皆大切な家族。なにがあつても壊れたりなんかしない。

ベルベットは自分の胸に手を当てながらそう心に刻んだ。

「なにが正直なんだ？」

「うひやう！」

突然横からカインが現れ、その不意討ちに一人ともが変な声を上げながらはねあがつた。

「な、何だよ！こつちまでビックリするとこだらうが！」

「カイン！あ、あんた、いつからそこに？」

「もしかして、さつきの話を聞いてた？」

「自分に正直にねつてどこからだ」

「どうやら最後の所しか聞いていなかつたようだ。それを聞き、二人ともホツと安心して いた。

「なんの話だつたんだ？」

ベルベットとニコはふふふと笑うと満面の笑みでカインに向き合うと

「なーいしょ！」

「なんだそりや」

「そう言えば、ニコは食料の買い出し？」

ベルベットはニコにそう訪ねた。

「そ、そつちは狩りの帰り？」

「ああ！大獵だつた！」

カインは自信満々にそう言つた。

「頼もしいね、将来いい旦那になるんじゃない？ね、ベルベット」

「ちょ、ニコ！」

ニコは茶化すようにベルベットのことをこつくと、ベルベットも顔を赤くしていた。
「なによ、まんざらでもないくせに」

「茶化さないでよ、まつたく」

するとニコがベルベットの側までいき耳打ちをしてきた。

（なに言つてるのよ、お互い好き同士ならこれくらいいかないと）

（だからって、いきすぎでしょ！）

二人がこそやつていると、カインがそんな二人のやりとりが気になつて話にわつて入つた。

「なに話してるんだ？」

「いや、なんにも！ベルベットがまんざらでもないつてさ！」

「はあ！？そんなこと言つてないでしょ！あんたも見てないでビシツといつてやつて！」
「ビシツと？」

「そうよ」

「まんざらでもない」

カインは真顔でベルベットに向かつて言つた。それを聞いたベルベットは顔がトマトのように赤くなつていつた。

「あ、あああんたまで、なにいつてんのよ！」

ベルベットは思いきりカインの腹を蹴り飛ばし、その様子をニコはニヤニヤしながら眺めていた。

6 話

「おじさん、薬買いに来たんだけど」

ベルベットとカインとニコは薬屋の前まで来て いた。

「カイン、アーサーにも伝えたんだが例の薬、まだ入荷してないんだ」「え、なんで・・・・・」

ベルベットが驚きの声を発した。

「まさか、業魔が・・・・！」

薬が遅れている理由なんてカインにはそれしか思い浮かばなかつた。

「町の方で業魔病がひどくなつてるそうだ。この辺りも業魔の群れがうろついているようだし」

「いつ届くの？」

「わからん。とどいたとしても値がいくらになるか・・・・・」

「そんな・・・・・」

「・・・・・・・」

ベルベットとカインは悔しい表情になった。もし薬が手に入らなかつたら、ライフィセツトがまた苦しい思いをさせてしまう。そう考えただけで、余計に嫌な気持ちになつた。

「ミッドガンド王国は、なにやつてゐわけ!? 軍隊とかいるでしょ?」

ニコは声を荒げながらそう言つた。ニコも一人と同じ気持ちだつた。

「そんなもの、とつくに業魔にけちらされちまつたよ」

「……ここは大丈夫だよね? ベルベットとカインのお義兄さんは対魔士なんだし」

ニコは不安そうな目で二人に言つた。そう、業魔とは普通の人間には太刀打ちできない。聖隸から力を扱う対魔士でなければ。もしくは、自分のような力の持ち主にしか。ベルベットとカインははつきりと頷いた。

「どうだかなあ? アーサーの右手は怪我で動かんのだろう?」

するとお店の店主が不安そうな声で言つてきた。

「そもそも、自分の妻子も助けられなかつたんだし……」

「つ! おい、それは!」

カインがその言葉に反応し、店主に反論しそうになると、ベルベットがカインの言葉を遮るように

「薬、届いたら知らせて」

「う・・・・もちろんだ。これはサービスだよ」

店主も自分の愚かさに気付き、お詫びのつもりなのか、アップルグミを3個もらつた。それをもらうと、ベルベットは暗い表情をしてさつさといつてしまい、店主み店の中にそそくさと入つていつた。

「ベル・・・・」

「ねえ、カイン」

振り替えると、ニコが真剣な表情でカインと向き合つていた。

「どうした? ニコ」

「カインはベルベットのこと・・・・好き?」

「え?」

なぜ急にそんなことを聞いてきたのかわからなかつたが、ニコの本気の気持ちが伝わり、こちらもちゃんと答えるべきだと思い、カインもニコと向き合つた。

「ああ、好きだよ」

その答えを聞くと、ニコは安心したように微笑むと

「なら、ベルベットの側にいてあげて」

「ニコ・・・・・・」

「あの子……普段しつかりしてるけど、やっぱり誰かがいててやらないと、親友としては心配なのよ」

ニコは心のそこからベルベットを大切に想つている。そんな気持ちが言葉の中から伝わってきた。

「だから、あなたがいつでも、どこでも駆けつけて守つてあげて」

「……ああ、わかった」

「じゃあ、約束ね」

ニコは両手を後ろに組んで、カインと向き合つて微笑んだ。

カインも、はつきりと頷いた。

「じゃあ、さつさと追いかける！」

ニコはベルベットの歩いていった方向に指を指しながらそう言つた。

「お、おう！」

カインも急いでベルベットのあとをおつた。

「頼んだぞ、男の子」

ニコは去つていくカインの背中を見つめながらそう呟いた。

「ベル！」

カインの声に気がついたベルベットがカインのほうへ振り向いた。その顔は少し暗い表情をしていた。

やはりさつきの店主の言葉を気にしているようだ。

「……そういうえば、ベルの作った特製キッシュ、最近食べてないなあ」

「え？」

「久しぶりに食べたくなつた。作ってくれよ、またさ」

カインは微笑みながらそう言つた。

ベルベットはカインが自分の気をつかつてていることが伝わり、ベルベットもそんな力インの気遣いに少し心が和らいだ。

「うん、そうね。明日作つてあげるわよ、今日の献立はもう決まつてるから」

「ちえ、なーんだ。じゃあ明日、約束だからな」

「わかつたわよ、また明日ね」

カインは頭の後ろに手を組ながらベルベットの先を歩いていった。

「・・・・・ありがとね、カイ」

「ん、なんか言つたか？」

ベルベットはカインに聞こえないくらいの声でそう呟いた。

「何でもないわよ！ほら、さつさと帰るわよ！ラフィイが待つてゐるんだから」

「お、おい！押すなつてーの！」

ベルベットはどこか嬉しそうにしながらカインの背中を押し、二人でラフィイのいる家へ走つていつた。

7 話

「たつだいま～」

「ただいま、ラフイ？」

二人は家に入ると、ライフィセツトが机の上で慌てて何かを隠す素振りをみせると、椅子に座つたまま、慌てて振り向いた。

「…………お帰り、一人とも」

「ラフイ！寝てなさいって言つたのに！」

「ちょっとだけだつてば」

ベルベットはライフィセツトに怒鳴ると、そのままおでこをつけた。

「ほら、熱下がつてない！すぐご飯の支度するから横になりなさい」

「…………ごめんなさい」

「ライフィセツト、こんな時間になにしてたんだ？」

「あ、うん！これなんだけど」

ライフィセツトは机の上で書いていたものを二人に見せた。

「なにこれ？」

「羅針盤！磁石を利用して方向がわかる道具なんだ」

「そんなの、太陽や星を見ればいいじゃない」

「バカだなあ、ベルは、それじゃあ天気が悪かつたらわからんじゃないか。そのための羅針盤だろ、なあライフィセット」

「なんでアンタが知つたかぶつてんのよ」

カインは得意気にそういうと、ベルベットは顔をひきつらせながら、カインの方を睨んだ。

「うん、そんなんだ、そこがこの羅針盤のすごい所で、これがあれば長い航海でも可能になつたんだ」

ライフィセットは紙に書いた羅針盤を指差しながら、楽しそうに熱弁した。

「ほら、船が揺れても正確に測れるように、ここが動いて水平を保つようになつてるんだよ！すごいでしょ！」

「・・・さつぱり、わかんない」

ベルベットはあまりこういうことにはあまり興味がないようで、ライフィセットの言つていることの凄さがあまりわかつてないようだつた。

それに対してもカインはうんうんと頷きながらライフィセットの話を聞いていた。どうやら彼はライフィセットと同じ気持ちだつたようだ。

「冒険の必須アイテムだよ？ なんでわかんないかなー・・・」

「ベルベットには男のロマンというのが分かつてないみたいだな」

「はいはい、分かつたから、ライフィセットはこっち」

そういうとベルベットはライフィセットをベットの方へ誘導した。

「二人ともケガしなかった？」

「ああ、むしろ大猶だつたぜ」

カインは自信満々にライフィセットに自慢気に話した。

「そろそろ俺も免許皆伝じやないかな。何せ俺は義兄さんの一番弟子だからな」

「いつからアンタが一番弟子になつたのよ、あたしだつて相当強くなつたんだから。いつとくけどね狩りならあたしのほうが大猶だつたんだから」

「強さの証は量より質だから」

「なによ、それ」

二人はどうつちが一番弟子かいい争つているが、どこか楽しそうにしていた。ライフィセットはそんな二人を見てクスクスと笑うと、二人は照れくさそうに顔をそむけた。

「そ、そうそうアーサー義兄さんだけど、今日はもう帰らないらしいぜ。何か用があるらしいから」

「うん、知つてる。シリーズに聞いた」

「義兄さんの聖隸……」

(・・・・・シアリーズ、来てたのか)
ライフィセットにはカインやアーサーと同じく高い靈応力を持つており、聖隸の姿を認識することができた。

「あんた、本当に聖隸の声が聞こえるのね」

「うん、対魔士の才能なんだって」

ベルベットはベットに座っているライフィセットの隣に座り込むと、優しい表情をしながら言つた。

「あんたなら、義兄さんに負けない対魔士になれるかもね」

「おいおい、俺だつているのも忘れるなよな」

「アンタは無理」

「即答!？」

「あはは・・・」

「・・・そうなりたい、お姉ちゃんやお義兄ちゃんと一緒に旅をして、不思議なものを見

たくさん見たい」

ライフィセットは病気が治つたらしたいこと、やりたいことを一人に話始めた。

「狩りだつて薪集めだつて、僕がやるし、業魔が来たつて守つてあげる」
 （ライフィセット……）

カインはライフィセットの病気のことは詳しくは知らなかつた。ただ定期的に熱を出したり、寝込むことがあつた。ここ最近は特にひどくなり、ベットから出られないということもあつた。こんな話をしたのはそんな自分の状態を察したせいなのかもしない。

「そうしたい……だけど」

そんなライフィセットをベルベットが優しく抱き寄せた。

「なつてくれなきや困るよ、ライフィセット」

「そうだな、きつとなれるさ、ライフィセットなら」

二人は信じていた。いつかライフィセットの病気が治り、家族四人で毎日を過ごせることを。そして、世界と一緒に見されることを。

「あと二十年後くらいで」

「そんなにかかるない！」

ベルセリアがそう茶化すと、ライフィセット頬を膨らませながら、反抗した。

「じゃあ、しつかりしてることを証明して」

ライフィセットをベットに寝かせ、ライフィセットにちゃんと薬を飲むように言うと、ベルベットは夕飯の支度をするためにキッチンに向かっていった。

「俺も手伝おうか？」

「いいわよ、あんたはラフィについてやつて」

ベルベットはカインにそういうとすぐに料理の支度を始めた。

「分かった、なんかあつたら言えよ」

「うん、ありがとう」

「お義兄ちゃんはお姉ちゃんのこと好きなんだよね？」

「なんだよ、いきなり」

今日は二回も同じことを聞かれるとは。そんなに自分はわかりやすいだろうか。

「お姉ちゃんつてあんまり素直じゃないから、僕も心配になっちゃうんだよね」

「ま、確かにそうかもな」

ライフィセットは少し暗い表情になりながら、話始めた。

「でも、それも僕に気を使つて いるせいなんだよね」

「ライフィセツト……」

ライフィセツトも気づいていた。カインとベルベットがお互いに想つているということ。それが自分のせいで妨げになつて いる感じていた。

「お義兄ちゃん、もし自分がいなくなつたら、お姉ちゃんのこと幸せにしてあげてね」

真剣な顔でカインに向き合いながら言つた。

ライフィセツトはまるでもうすぐ死んでしまうかのような言い方をしてきた。

「冗談でもそんな遺言みたいな言い方をするな、お前はいなくなつたりしない」

カインはそんなライフィセツトの様子がひどく心配になり、ライフィセツトの手を強く握りながら言つた。

「俺もベルベットもお前がいなくちゃ、幸せになんてなれない」

「お義兄ちゃん・・・・」

「俺の夢は家族皆で世界を見ることなんだ。ライフィセツトだつて同じだろ?」

カインは自分の夢がライフィセツトの同じく、皆で世界を見て回ることだつた。カインもよくアーサー義兄さんの本を見て、まだ見ぬ世界に心踊らせて いた。ライフィセツトと同じように。

「だからさ、俺に夢を叶えさせてくれよ」

「……うん、ありがとう……お義兄ちゃん」

するとカインは急に立ち上がり自分の部屋から、一冊の本を持ってきた。

「これは？」

「昨日村の外から来たのを手に入れたんだが、これには恐らく、オメガエリクシールについて記述された古代書だ」

「えっ！ それって」

「オメガエリクシール——どんな病や傷も治すことができるという、伝説の秘薬とされている。」

かつては存在していたらしいが、現在はその製造方も失われてしまつたとされたいた。

「まだ解読しきれてないが、もしこの製造方がわかれば、お前の病気も治せるかも知れない」

「……そなんだ、治せるんだね……」

「ああ、まだ希望は残つてる。だから、お前も諦めるな」

「……うん」

ライフィセットは少し元気のない返事をしながら、頷いた。治せるかもしれないといふのに、何故があまり嬉しそうな様子を見せなかつた。やはりまだ半信半疑なのだろう

か。

「カイ！ ラフィー！ 夕飯できたわよ～！」

部屋の外からベルベットの声が響いてきた。

「ああ！ 今行く！」

カインはライフィセットと一緒に行こうとすると

「ごめん、先にいってて。僕なら大丈夫だから」

「そうか？ あまり無理するなよ」

「うん、ありがとう」

カインはそのまま部屋から出ていくと、一人になつたライフィセットはベットに俯きながら、苦い表情をしていた。

「……………ごめんね」

ライフィセットはそうポツンと呟くと、ベットから立ち上がり、部屋をあとにした。

8話

—夢を見た—

—赤い月の光の下で剣をもち、二人の男が戦つてゐる夢を—
二人は激しい戦いを繰り広げていた。

大地は盛り上がり、山はさけ、あらゆるもののがその戦いによつて破壊されていた。
二人の手にははそれ違う剣が握られていた。

一人は光纏つた剣を、もう一人には闇を纏つた剣が握られていた。

「何故だ！この戦いに意味なんかない！俺達が殺しあう必要なんて……」

聖剣を持つてゐる男は戦いをやめるよう、よびかけたが、魔剣使いの方は戦いを、止
めるつもりはないようだつた。

「意味ならあるさ、アンタを殺せば、俺は全てを手にいれることができる
「手にいれる？なんのことだ？」

「……アンタには、わからぬことさ」

魔剣使いの目は聖剣使いの方を忌々しげに睨んだ。

その目には様々な感情がこめられていた。

憎しみ、恨み、嫉妬、そして憧れ

魔剣使いはその全てを今ぶつけようとしていた。

「俺は、お前を殺したくない」

「まるで俺をいつでも殺せるような言い方だな」「違う！聞け！——ル！俺は……」

「俺はもう、昔とは違う！」

男は剣を構え、その刀身を赤黒いオーラが纏つていった。

「戦え！——ン！」

聖剣使いは、目をゆっくり閉じ、再び剣を構えた。

「……わかった」

再び目を開くと、その目は強い意志を宿していた。

そして、男の持っていた剣にも、光のオーラが纏い始めた。

「いくぞ！——イン！」

「来い！」

光と闇がこの赤い世界で激突し、眩い閃光が世界を包んだ。

—起きて—

声がする

—起きなさい—

なつかしい声が聞こえる

—カイ—

誰だ?

—カイ—

君は—

「起きなさい！カイ！」

「うお！？」

耳もとに張り裂けそうな声が響き、カインはベットから飛び起きた。

「あれ？ここは……」

なんだか変な夢を見ていた気がする。思い出そうとしても頭に霧がかかつたようになり思い出せなかつた。

目の前にはひどく慌てた様子のベルベットがいた。

「寝ぼけてる場合じやないわよ！早く来て！」

「どうしたんだよ、そんなに慌てて！」

「ラフィイがいないのよ！」

「なに!?」

ライフィセツトが居なくなつたと聞いたカインは急いでベットから降り、ベルベットと一緒にライフィセツトを探しにいった。

「まさか、一人で村に……？」

「手分けして探そう、そつちの方が見つかるかもしない」

「わかつたわ！」

二人は手分けしてライフィセットを探して回った。

カインも村の人達に話を聞きながら、探したがライフィセットを見たという人は居なかつた。

ここまで目撃情報がないということは村にいない可能性が高い。つまり一

「森に入つたのか、一人で……！」

「カイン！」

ニコが急いだ様子でカインの元に走つてきた。

「ニコ！ ライフィセット見なかつたか？」

「ライフィセットなら森にいつたと思う、さつきベルベットにもそう伝えたから急いで
追いかけた方がいいよ」

「やつぱりか、ムチヤするなもう！」

「私は念のために村の中を探してみるね」

「ああ、頼む」

カインは急いで森の中に向かおうとしたが、ニコが連れていた二匹の犬——オルとトロ
がカインの服に噛みついていた。まるで森に向かうのを止めようとしているように。

「こら！ お前たち、何してるの！」

「どうしたんだよ、お前ら」

「この子達さつきから様子が変なの、まるで何かに怯えているみたいに」
確かにいつもと様子がおかしい。カインに森に向かわせないよう必死に止めようとしているようだった。

（森に何かいるのか？だとしたら二人が危ない）

カインはオルとトロの前に座り、優しく頭を撫でた。

「大丈夫、必ず二人を連れて戻つてくる」

「カイン……」

「俺が強いのは知ってるだろ？」

すると、ゆっくりと二匹は服から離れ、大人しくなった。カインも立ち上がり、ニコと向き合い言つた。

「じゃあ、ここは任せた」

「気をつけてね、カイン」

カインは軽く手を振ると、森に向かつて走つて行つた。

「なんだ、このピリピリする感じは」

森に入つてしばらくすると、辺りから嫌な気配を感じ始めた。前にはこんな感じはしなかつたはずなのに。

(二人は無事なのか?とにかく急がないと)
だが森に入ったはいいが、二人が森のどこにいるのかが分からなかつた。二人とも合流していればいいが。

二人が行くとしたら何処なのか、必死に考えていた。

「そうだ、あそこなら」

岬の祠に行つてゐるかもしけない、ライフィセットはよく海の話をしていた。あそこなら海も見ることができる。
カインは急いで、岬に向かつていつた。

「この感じは・・・・!」

岬に近づくとさつきの感覚が大きくなつていつた。

この感覚はどこかで覚えがあるような感じがした。

岬にたどり着くと、ライフィセットとベルベットが業魔に襲われていた。

「ベル! ライフィセット!」

二人とも業魔に傷を負わされており地面に倒れていて、身動きがとれない状態だつた。そして今まさに業魔の爪が二人を切り裂こうとしている瞬間だつた。

「やめろおお!!」

カインはその身に宿した聖剣を出現させ、一瞬で業魔との距離をつめ、切り裂いた。

業魔はそのまま地面に崩れていき、二度と動かなかつた。

「はあはあ・・・・・！二人は!?」

二人とも傷をおつっていたが、気を失つてゐるだけで、命に関わるほどではなかつた。

カインはとりあえず無事なことに安堵したが、倒れていれる業魔に目をやつた。

(俺が・・・・殺したのか)

業魔も元は人間だという話は聞いていた。人間だつたものがある日突然異形の姿に変貌すると。だがやはりこれは人間なのだろうとカインはそう感じていた。そしてその人間を殺したというのに、自分は驚くほど冷静だつた。一人を守るためにとはいへ、何の躊躇もなく人を殺した。相手が怪物の姿をしていたからか？人間とわかつていても人の形をしていなかつたから殺しやすかつたとでもいうのだろうか。いくら考えても今のカインには答えは出なかつた。

「とにかく一人を安全な場所まで運ばないと」

カインは気持ちを切り替えて、一人を安全な場所まで運ぼうとした。

「油断するなど彼から教わらなかつたのか？カイン君？」

「？」

カインは背後から感じた気配に反応して、とつさに剣で切ろうとしたが、首筋に衝撃が走り、そのまま地面に崩れ落ちてしまつた。

（な・・・・んだ？一体・・・・）

カインは状況をまったく把握出来ないまま、そのまま意識を手放してしまつた。

9話

—お義兄ちゃん、お姉ちゃんのこと、幸せにしてあげてね—

ライフィセット・・・・何を・・・

—ごめんね—

「はっ！？・・・・ここは？」

カインは何処かの薄暗い場所で目が覚めた。

辺りを見渡してみても、暗くてうまく把握出来なかつたが洞窟の中にいるということはわかつた。

「どうして、こんなところに？」

よく目を凝らしてみると先に道が続いていた。風の音が聞こえてくるので、もしかしたら外に出られるかもしねない。

(早くベルとライフィセットの無事を確かめないと)

カインは外に通じていて、あろう道を走つていった。
しばらく行くと光が見えており、やはり外に通じていたみたいだつた。カインがそのまま外に出ようとしたときだつた。

「ぐつ！ 何だ？」

何か見えない壁のようなもので外に通じている出口を塞いでいた。

「これは……まさか聖隸術？」

何故こんなものが洞窟の出口にかけられているか分からなかつたが、明らかに自分を出さないために仕掛けられた仕掛けられたものだとわかつた。そしてこれをかけた術者も容易に予想できた。

「まさか、義兄さんが？」

いや、そんなはずない。何故義兄さんが俺を？

だが、直感的に分かつてしまふのだ、いつも義兄さんの力を毎日見ていたカインには。

「だが、今は……！」

「ここを抜け出すことに集中する……！」

カインは聖剣を出し、靈力を込めて思いきり壁に向けて剣を降り下ろした。

「光波刃！」

カインの術技によつて壁はコナゴナに吹き飛ばされた。

「はあはあ……やつぱり、術技使うとキツいな……」

カインは体力を消耗しながらも、なんとか洞窟の外に出た。外に出てみると、もうすでに夜になつていた。

「なんだ？ 夜にしては明るいが……」

カインは月の光によつて周りが明るくなつていて、空を見上げると――

「な……!? あれは……!?」

赤い月が世界を照らしていた。

「まさか……緋の夜？ なんで……？」

またあれが始まつてしまふのか、あの悪夢が……！

カインは胸騒ぎを感じ急いで村の方へ走つて行つた。

「なつ……これは……!?」

村はまさに地獄と化していた。辺りは真っ赤に染まり、死体が散乱し、異形の化け物が村を蹂躪していた。

「なぜ、こんなにも業魔が!?」

わけもわからずカインは村の中を駆け抜けた。

カインは走りながら考えていた。何故こんなにも業魔が溢れたのか、昼間には予兆すらなかつたのに。

考えられるとしたら、この「縁の夜」が関係しているのは間違いない。そして業魔は元は人間、だとしたら

(まさかこの業魔たちは……！)

「グルル！」

「！」

頭上から業魔が落ちてきてカインの行く手を遮つてきた。目の前にいる業魔はおそらく村の人間だ。何故業魔になつたかはわからないが、殺すわけにはいかない。

「なら、ここは逃げの一手！」

カインは聖剣を出し、目の前の業魔を衝撃波で吹き飛ばした。業魔が態勢を崩した隙に一気に駆け抜けた。

「ライファイセット、ベル、ニコ……！皆どうか無事に……！」

カインは村の中を駆け抜けながら、一人でも無事な人を探したが、一人も無事な人間はいなかつた。そして3人の姿も何処にもなかつた。

(死体がどこにもないつてことは、3人は無事つてことだ。大丈夫、諦めるな)

カインはそう自分にそう言い聞かせながら、探し回った。カインはまず、自分の家に急いで向かつた。もしかしたらまだ家にいるかも知れないと思つたからだ。

「ベル！ライフィセット！」

カインは家に入り、二人を探したが何処にもいなかつた。やはりもう何処かへ逃げたのかも知れない。

（もしかしたら、二人も業魔に……）

変わつてゐるかも知れない。

そんな最悪なことが頭をよぎつた。

（駄目だ！そんなことを考えるな！諦めるな、まだ希望はあるはずだ！）

考えろ、いるとしたら何処だ。あの時、前の「緋の夜」の時はどう逃げた。

「村のはずれ……岬か？」

逃げるとしたらあそこしかない。カインはそこに皆がいる可能性をかけ、すぐに岬へ

向かつた。

「はあはあ……!!」

カインは森の中を駆け抜けていた。何体もの業魔を追い払いながら、岬の方角へ一直線に走つていた。

カインは既に靈応力を過剰に使つてゐるせいで満身創痍だつた。業魔を殺さず、追いかうだけにとどめているので余計に体力を、消耗していた。

「あと少し・・・・・！もう少しで岬だ・・・・！」

きつとそこにいる！あいつらならきつと無事だ！

カインは諦めずに岬に向かつた。そして森を抜け、岬に入つた瞬間、満身創痍だつたカインはその場で膝をついた。そして顔を上げると目の前にあつたのは――

「・・・・・・え・・・・・？」

倒れ付しているベルベットと、ライフィセツトの体を貫くアーサーの姿だつた。

「義兄・・・さん・・・？」

訳が分からなかつた、何故こんなことになつてゐるのか。何故ベルベットはシアリーザによつて拘束されているのか。何故アーサーはライフィセツトを刺してゐるのか。アーサーはそのまま刺し貫いているライフィセツトを祠の穴の中へ落とそうした。

「なつ！待て・・・・・ぐつ！」

カインは立ち上がりろうとするも、すでに体は限界に近かく、そのまま地面に倒れてしまった。

（くそっ！体がもう！）

「あああああくくくつ！！」

ベルベットは無理やりシアリーズの拘束を引き剥がし、二人の所へ走っていった。ライフィセットが穴の中へ落ちる瞬間にベルベットがギリギリの所へライフィセットの手を掴んだが、ベルベットも穴の中へ落ちようとしていた。片手でライフィセット手を掴み、もう一方の手でなんとか崖の所を掴んでいる状態だった。

「ベル・・・・！」

カインは立ち上がりろうと、力を込めるがやはり体は動かなかつた。

（くそ！！くそ！！動けよ！今動かないといけないんだ！今動かなきやダメなのに！）

「放しなさい。」それ”は世界への捧げものだ

アーサーは別人のような冷たい目でベルベットを見下ろしていた。まるで今までのアーサーが嘘のように。

「なんで・・・・！」

ベルベットはぶら下がつた状態でアーサーのことを睨んだ。

何故こんなことを。なんで私たちを。ベルベットには目の前にいるのが自分の慕つ

ていたアーサーには見えなかつた。別人のようにアーサーは冷たい声でベルベットにいいはなつた。

「もう絶対に助からない」
「うそだうそだうそだあああ!!!」

嘘に決まつてゐる。義兄さんがこんなのことをするはずがない。ライフィセットが死ぬはずなんかない。この状況のなにもかも嘘に決まつてゐる。

「……そうか。やはりお前は」

アーサーはゆつくりと剣をベルベットに向け——

「!!やめろおお!!アーサー!!」

「感情に従うのだな」

ベルベットの腕を切り落とした。

ベルベットとライフィセットはそのまま穴の中へ落ちていつた。落ちる瞬間、ベルベットの目は苦悶と絶望の目をアーサーに向け、そんなアーサーの目は落ちていく二人

をただ冷たい目で見下ろしていた。

「ああああ～～～！」

カインは最後の力を振り絞り立ち上がろうとおきあがつたが、背後から手で頭をわしづかみにされ、地面に押さえつけられた。

「うぐっ！」

「大人しくしていろ」

カインは自分の体を押さえつけている、男を睨んだ。そいつは茶色い分厚いローブを身に纏つており人相や体格は把握出来なかつたが、声からして男のようだつた。

「放せええ!!」

カインはなんとか抜け出そうするが、すごい力で押さえつけられてびくともしなかつた。

「そこで見ているとい、愛するものが失われていく様をな」

「ぐう！」

すると穴の中から光が現れ、黄金に輝く龍が天に昇つていった。

「これは・・・あの時と同じ・・・！」

そして、龍に突き上げられたようにベルベットが穴の中から現れ、地面に叩きつけら

れた。

「ベル！……うつ！」

カインは急に胸に熱を感じ始めた。あの時と同じ感覺だつた。あの時も急に胸が熱くなつて――

「始まつたな」

ローブの男がそう呟いたあと、ベルベットの方を見ると、ベルベットにも変化があつた。

「あ・・・・・はあ・・・・・」

「ベ・・・・・ル・・・・・？」

ベルベットの左腕には禍々しいほどの黒い腕がついていた。まるで獣のような大き

く、そしてベルベットの怒りや憎しみがそのまま具現化したようだつた。

「・・・・・・・・・

そんなベルベットをアーサーは黙つて見つめていた。

すると周りに業魔が群がり始め、二人の周りを囲んでいた。

「ま・・・・・ずい」

カインは今も襲つてくる胸の痛みに耐えながら、二人を見ていた。こんな時に自分はなにもできない。カインは歯を血が出るまでくいしばりながらなんとかここを抜け出

そうとしていた。

すると業魔の一体がベルベットに飛びかかってきた。

「ベル！」

ベルベットはその黒い腕で業魔の頭をわしづかみにするとそのまま地面に叩きつけた。

「ふうううっ!!」

すると業魔がベルベットの腕に吸い込まれていった。

「あれは……？」

「やはり”喰魔”か」

ローブの男から聞きなれない言葉が聞こえてきた。この男はあの力のことを知つているようだつた。

「”喰魔”？」

「”彼の主”の力の一部を宿したものだ、命を喰らう力をな」

“彼の主”何だ？どこができるいたような……？

「ようするに……”あれ”も化け物だよ」

カインはベルベットのことを化け物と呼んだこの男の言葉に怒りを感じた。カインは男の言葉を否定した。

「ベルは化け物なんかじゃない・・・・！」

「そうか？ならあれを見ろ」

男がベルベットの方へ顔をむけ、カインもそれにつられて見た。

「うおおおお〜〜!!」

ベルベットは業魔をそのその禍々しい腕で切り裂いていた。憎しみのままに、ただ殺していた。獣のように、その身を血で真っ赤に染めながら。

「ベル・・・・」

「なんで殺した！」

「あの子の血がこんなに・・・・！」

「なぜなぜなぜえええ！」

「一方的だつた。

「ライファイセツトが！ラファイが！」

「何をしたつて!!」

「どけえええつ！」

ただ目の前の男を殺すために、憎しみのあまりベルベットは殺しつづけた。

ようやく全ての業魔を殺し終えたベルベットは、その牙を今度はアーサーに向けよう

としていた。

「周りを見てみろ」

アーサーがそう言うと、ベルベットは周りを見渡してみた。

「！」

そこには村の人達の死体があつた。

「人間に……戻ったのか……！」

さつきまで戦っていたのは、村の住人だつたのだ。そしてそこには変わり果てた二コの姿もあつた。

「あ……あ……」

ベルベットは自分が殺したのが村の人達だと知り、茫然自失となり立ち尽くしていた。

「村に業魔病が広がつたのだ。だが、案ずるな。この痛みは、私が！」
「うあああ～～つ！」

ベルベットは怒りのままにアーサーに向かつていつた。

「よせっ～～～！ベル！」

カインの言葉はベルベットに届くことなく、ベルベットはアーサーに斬りかかつた。
〔対魔士アルトリウス・コールブランドがとめる〕

「ぐあっ！」

ベルベットは炎の壁によつて勢いよく吹き飛ばされ、叩きつけられた。
すると、アーサーの隣から女性が出現した。

「シリーヴィー・・・・！」

周りに何体もの聖隸が出現し始め、ベルベットの周囲を取り囲んだ。
アーサーがベルベットの所へ近づき見下ろしながらいつた。

『鳥がなぜ空を飛ぶか？』これが俺の答えなんだよ、ベルベット』

アーサーは剣を再びベルベットへ向けた。

「やめろ・・・・」

カインは体に力を振り絞り拘束をとこうとした。

「よせ、大人しく！」

ピリツとカインの体に電気がはしつたように、変化がおき始めた。

「やめろおお！！」

「!!」

カインはローブの男を靈応力で吹き飛ばした。
男はアーサーの隣に飛び、移動した。

「これは・・・・」

「カ・・・イ・・・?」

アーサーは興味深そうにカインの変化を見ており、ベルベットも満身創痍の状態になりながらもカインの方をみていた。

「やはりな、”彼の主”がきつかけだつたか」

ローブの男は予想通りだと言わんばかりの様子だつた。

カインは今までとは比べものにならないほどどの靈應力を宿しており、体から出ている靈力が視認できるほどだつた。そしてカインの腕には先程までにはなかつた刻印が刻まれていた。

「そうか・・・あのが・・・」

「ああ、”カインの刻印”だ」

カインはベルベットの前に立ち、アーサーに剣をむけた。

「お前らは・・・絶対に許さねえ」

「そうか・・・やはり、お前も感情で動くか」

「光波」

カインは剣を構えながら、剣に靈力を込めると一瞬で間合いを詰め——

「刃！」

アルトリウスに剣を降り下ろすが、その剣をローブの男が押さえ込んでいた。

「邪魔だ！」

「悪いが、この男を殺らせるわけにはいかないんだ」
二人は一度距離を取り、再び構えた。

「ライトニング」

ローブの男は掌から電撃をカインにむけて放つた。

(こいつ！後ろにベルがいるのも見越して！)

カインは避けられずにその身で攻撃を防いだ。

「くっ！」

「カイ！」

ベルベットが叫んだ、自分のせいでカイが傷ついてしまったことを気にしたのだろう。

「大丈夫だ！」

「いや、そうでもないさ」

ローブの男は一瞬でカインの背後にまわっていた。

(なっ!? いつのまにー)

「獅子戦吼」

カインはものすごい衝撃を真横に食らわされ、そのまま壁に突っ込んでいった。

「ぐはっ！」

「やはり覚醒したばかりではこの程度か」

「くつ！このー」

カインは立ち上がり反撃しようとするも、またすぐ目の前に男が現れ、カインの肩に触れた。

「ジャッジメント」

体に直接雷光を流しこまれ、カインはそのまま膝をついた。

「があああっ!!」

「まだ足りないようだな、そうだな・・・目の前でもう一度大切なモノを失えばわかるか」

ローブの男は手にカインとは異なる剣を出現させ、ベルベットの方へ向かっていつた。

「よせ！」

ベルベットの体は先程の戦いで身動きが取れない状態だつた。

（よ、避けきれないっ！）

ベルベットはとつさに目をつぶつて、伏せると顔に生暖かいものが飛び散るのを感じると、一瞬自分の血かと思ったが痛みがないのでゆっくり目を開けると一

「…………え…………？」

「そこには剣で貫かれた、カインがいた。

「ベ……ル……」

「カイ……どう……して」

「ふん、その身をていして庇うとはな」

ローブの男は剣を引き抜き、カインはそのまま地面に崩れていこうとしたが、ベルベットがそのまま抱きつくようにカインを支えた。

「カイ！ カイ！」

「ごめんな……ベル……ライフィセットを……守れなくて」

「カイのせいじゃない！ それは！」

「お前らには……今まで……大したこと……してやれたかつた」

カインの体がどんどん冷たくなつていくのを感じるとベルベットは左手で触らないよう抱きしめる力をもつと強くした。

「そんなことない！ 一緒に居てくれるだけであたしたちは……あたしは！」

「そう……だな……俺も……もつと……皆と……一緒に……いたか……」

「カイ……？」

ベルベットはカインの体を支えきれなくなり、地面に倒れ、カインはそのまま動かな

かつた。

「ねえ……カイ？……起きてよ……」

ベルベットはカインの体を揺さぶつたが彼の体はひどく冷たく、瞼が開くことはなかつた。

「お願ひ……起きて……あたしを一人にしないで……」

ベルベットは大粒の涙を流し、その涙がカインの顔にポタポタと落ちていつた。

「カイ!!」

ベルベットはカインの体にうずくまりながら、必死に呼び掛けていた。そんなベルベットをみていたアルトリウスがゆっくり近づいていき、こういいはなつた。

「カインは感情に従つたためこうなつた」

ベルベットはアルトリウスを睨み付けた。

そしてベルベットに剣を向け――

「これがお前たちの結末だ」

「アー・・・サー・・・」

「許さなくていい。すべては私の罪だ」

「アルトリウスッ!!」

降り下ろし、ベルベットの意識を闇の中に落とした。

10話

「カイ・・・・」

—聞こえる—

「起きてよ・・・・」

—あいつの声が聞こえる—

「あたしを一人にしないで・・・・」

—そうだ・・・・俺はまだ—

「カイ!!」

—死ねない—

「どうやら、終わったようだな」

闇の中から一人の老人がアルトリウスの背後から表れた。

「メルキオルか」

メルキオルと呼ばれた老人はアルトリウスの元へ歩みよると、聖隸に抱えられたベルベットを見ながら答えた。

「これが”喰魔”か、なるほど奇怪なものだな。よもや腕だけが変化するとは」

ベルベットの腕を興味深く観察したあと、血まみれで倒れているカインの方へ視線を移した。

「そして、あれが聖剣の担い手。お前が特別気にかけていた少年か、アルトリウス」

「・・・・・」

アルトリウスは無言で倒れているカインの方を見つめていた。アルトリウスは元々情の深い男だ、やはり思うところがあるのだろう。

「あの少年については詳しく調べておきたかったのだがな、あれほどの力を宿しておる

のだ。殺しておかなくては後々厄介な存在となっていたはずだ』

メルキオルは少々惜しい気持ちも内心あつた。だが、先程のカインのあの力。聖隸も使役せずに聖隸術に似た力行使し、靈應力に関しては自分やアルトリウスをも凌ぐ素質をもつていた。あのまま生かしておいてはあまりに危険な存在だつた。

「貴様も彼には期待をしていたのではないか？マーリンよ」

ローブの男——マーリンは視線をカインの方へ向けたまま、メルキオルに告げた。

「ああ、期待しているさ。今もな」

「何？」

メルキオルはマーリンの言葉に疑問を持ちながら、カインの方へ視線を向けると、そこには信じられない光景がうつった。

「・・・うつ・・・ぐつ」

なんと死んでいたはずのカインが立ち上がり始めたのだ。メルキオルは陰でカインとマーリンの戦いを見ていたが、確実にカインは急所を剣で貫かれたはずだ。そして確かにカインの靈應力の消失も確認した。それなのに、カインの靈應力は復活し、傷も完治していた。

「なんと・・・これは・・・！」

「・・・カイン・・・まだ立ち上がるか」

メルキオルは目の前の事態に驚愕し、アルトリウスはあまり驚いた反応はせず、立ち上がろうとしているカインの姿をじっと見ていていた。

「あれが”刻印”の呪いだ」

「呪いだと？」

マーリンは何故カインが復活したのか知っている様子で、メルキオルはマーリンに質問した。

”刻印”は封印の鍵穴だ。その封印が破れれば、世界が滅びるほどの大厄災が起きるといわれている。そしてその封印を永遠に守らせるため、その”刻印”を刻まれた者は不死の呪いがかけられた』

「はあ・・・・！はあ・・・・！俺は・・・・・一体どうなつて・・・・・」

カインは自分の貫かれたはずの腹を触るが傷か跡形もなくなくなっていた。

「お前が長い間力と記憶を失っていたおかげで、”刻印”が表に現れずすつとお前の体の内に隠れてしまっていた」

「お前は・・・・！」

「やはりカノヌシの解放で刻印の出現はなつたな」

マーリンはカインにそう告げながら、魔剣を片手に歩みよってきた。

すると、カインはマーリンの後ろにいるベルベットの姿が目に入った。

「！ベル！」

ベルベットは聖隸に抱えられており、ピクリとも動いていなかつた。どうやら気を失つてゐるようだ。

カインは聖剣を出現させ、ものすごい速度でベルベットの所へいこうとしたが、マーリンがその行く手を阻み、カインはそのまま聖剣を降り下ろすが、マーリンの魔剣で塞がれてしまつた。

「どけえええええ！」

「悪いが、あの娘には我々の計画の礎になつてもらう」

「なんだと？どういうことだ！」

カインは一度距離をとり、マーリンと向き合つた。

「あの娘にはお前と同じ絶望を味あわせる、怒りと憎しみに染まつたかつてのお前と同じにな」

「かつての・・・俺だと・・・？」

目の前にいる男は自分のことを知つてゐるのか？ベルベットに絶望を与えるというはどういうことなんだ？

（いや、今はそんなことはどうでもいい）

カインは聖剣を再び構え直し、その切つ先を目の前の敵に向けた。

(今は！ベルを助け出すことだけ考えろ！)

カインは再びマーリンに切りかかかり聖剣を降り下ろした。マーリンは魔剣でその攻撃を防ごうとするが、カインは一瞬だけ聖剣を自身の体に戻し、攻撃は空振りになつた、虚をつかれたマーリンは一瞬動きがとまり、カインはそのまま隙ができた脇に潜り込むと、再び聖剣を出現させそのままマーリンの体を風ぎ払つた。

「ぬっ！」

マーリンはそのまま吹き飛ばされ岩盤に叩きつけられた。

その隙にカインはベルベットの元へ向かおうとしたが、

そばにいたメルキオルが手を合わせるとそこから黒い球体が出現し、それをカインに放つた。カインはその球体を聖剣で切り裂き、そのままメルキオルを斬つた。

「邪魔をするな！」

「そうはいかない」

「何！」

斬つたはずのメルキオルが今度は背後にいた。カインはすぐに背後にいたメルキオ

ルも切り裂いたが、今度は何体も現れ、カインの周囲を囮んでいた。

(幻術？いや確かに手ごたえはあつたはず！)

カインはこのまま斬つていてもらちがあかないと判断し、剣を脇にとり剣先を後ろに

下げる構えをとると、刀身が炎を纏つていった。

「魔王炎撃波！」

そのまま周囲にいたメルキオルたちを一度に消し去ると、再びベルベットの元に走り出した。

「どうやら、今までのお前ではないようだな」

「アーサー義兄さん・・・・！」

カインは目の前に立ち塞がつているアルトリウスを睨み付け、その切っ先をアルトリウスに向けた。

「あんたがなんでこんなことをしたのか、なんでライフィセットを殺したのか・・・・知りたいことは山ほどある・・・・だけど

カインが剣を構えると、剣が再び光を纏い始めた。

「ベルを傷つけるなら・・・・俺の敵だ！」

「それがお前の覚悟か・・・・」

カインは思いきり地面にを蹴つて、アルトリウスに向かつて切りかかつていった。

「はああああ！」

アルトリウスは手に持つていた長剣を構え、カインの攻撃を迎え撃ち、カインの斬撃とぶつかろうとしていた。

その時、上空から突如二人の間に光の球体が落下し、二人はその衝撃で後方へ吹き飛ばされた。

「！」

「な、なんだ!?」

二人はなんとか態勢を立て直すとそのまま球体に対して警戒心を抱いた。
「ようやくか」

「これで世界の”理”に一步近づいた」

カインの後ろにいたメルキオルとマーリンはすでにあれがなんなかがわかつているようだつた。

いや、本当はカインにもわかつていていた。目の前にいるあれがなんなのか。

7年前に感じたあの気配だつた。

「来たか」

アルトリウスは待ちわびたかのような口調で球体をみていた。

「うん、ごめんね遅くなっちゃつて」

すると、球体の中から声が聞こえてきた。その声はカインにとつてとても聞きなれた声だつた。

(まさか・・・いや、そんなはずはない・・・だつてあいつは)

少しずつ球体が縮んでいきその姿を表した。その姿にカインは構えていた聖剣を下ろし、驚愕の表情を浮かべながら目の前のやつをみていた。

「やあ、お義兄ちゃん」

「それは紛れもない、アルトリウスに殺されたはずのライフィセットだつた。

「ライ・・・・・・・・・・・・・・・?」

カインは構えていた聖剣を下ろし、目の前にいるライフィセットを信じられないような目で見つめていた。

ライフィセットの姿は髪が少し長くなり、白い衣装を身に纏っていた。

カインは聖剣をしまつて、ゆっくりとライフィセットに歩みよつていき、その頬にふれた。それは間違いなくライフィセットの顔だつた。

「ここにいるのか・・・・・? ライフィセット・・・・・」

「うん、僕はここにいるよ」

カインは嬉しさのあまり目に涙を浮かべ、ライフィセットを抱き締めた。

「ライフィセット・・・・・!」

だがその時、カインは全身に悪寒が走つた。とつさにライフィセットを突き放してしまい、ライフィセットは驚いた顔をしていた。

「どうしたの、お義兄ちゃん?」

この感覚は、ライフィセットから発せられた寒気だつた。

「・・・・違う」

「え？」

「お前は・・・・誰だ？」

姿も声も仕草も何もかもライフィセットそのものなのに、なにか決定的なものが欠けているような感じがする。

「何いってるの？お義兄ちゃん？僕はライフィセットだよ」

「違う！」

カインは聖剣を出し、そのまま刀身をライフィセットの首もとに向けた。

「お前からは、ライフィセットとは違うものを感じる。そうだ、この感じは7年前のあの時の・・・・」

あの日も今のような嫌な感じかした。その気配が今は目の前にいるライフィセットらしき者から感じる。

「ひどいよ、お義兄ちゃん。なんでそんなこというの？」

そいつは目に涙を浮かべながら顔を俯かせて、手で涙を拭っていた。

「そんなこと言われたら僕・・・・悲しくて・・・・悲しくて・・・・」

「食べちゃいたいよ」

「!?

カインは上空に気配を感じると、巨大な口が上から落ちてきた。間一髪かわすと、それは巨大なヘビのような形をしており、上を見ると魔方陣が出現しており、そこから出てきたようだつた。

「こいつは!?

その化け物はいまなおカインを食らおうと、目の前にせまつてきた。カインは一度上空に飛び、ヘビの攻撃をよけた。

「このまま、叩き込む!」

カインは両手で聖剣を握りしめて、腕に力を込めて、落下の衝撃に合わせて思いきり聖剣をヘビに向けて降り下ろした。

「剛・魔神剣！」

ものすごい衝撃がヘビに叩き込まれたが、思った以上に頑丈でたいしてダメージを与えられず、態勢を崩されたカインは、そのままヘビに体当たりを食らい、地面に叩きつけられてしまった。

「ぐはっ!!」

カインは急いで立ち上がり、ヘビとの距離をとつた。

「くそっ！たいして効いてないとはな」

カインは胸を抑えながらそういった。さつきの攻撃がかなり効いたようでダメージもこちらが上だった。

（あれが効かないとなるとこちらも一か八かで大技をぶちこむしかない）

カインは聖剣を構え直し、刀身に力を込め始めた。すると聖剣が今までにないくらいの強い輝きを見せ始めた。

（仕留める必要はない、あの上空にある魔方陣に押し込みさえすれば）

切つ先を目の前にせまっている、ヘビに向けた。

「これで終わりにする！光竜滅牙槍!!」

カインが聖剣をヘビに突き刺すと刀身から何体もの竜が出現し、ヘビに食らいついていき、そのまま魔方陣の中へと押し戻し魔方陣とともに消え去つていった。

「まさか、カノンシを押さえ込むとは」

「これくらいはやつてもらわんとな」

メルキオルは驚愕の表情で先程の戦いを見ており、対するマーリンはさも当然のよう見ていた。

「はあ・・・・はあ・・・・！」

「あゝあ、押し戻されちゃつた」

ライフィセットらしき者は残念そうに、頬を膨らませまるで拗ねた子どものようだつた。

「お前は一体・・・・」

「聖主カノンシだ」

アルトリウスはカインにそう告げながらライフィセット——カノンシの側まで歩みよってきた。

「カノンシだと？」

「そうだ、ライフィセットの魂はカノンシとして転生を果たしたのだ」

転生——聞いたことがある、人間だつた者があるきつかけで聖隸に転生すると。だがそれなら説明がつく。この目の前にいるライフィセットのことが。
「お前たちは・・・ベルベットに絶望を与えると言つていたな。あれはどういう意味だ」

「それはね、僕がお姉ちゃんを食べるためだよ」

「こいつ……今何ていった？食べる？ベルベットを？」

「お姉ちゃんには絶望や憎しみに心がいっぱいになつてほいんだ。そうすれば僕もお腹一杯になるし、お姉ちゃんともずっと一緒になれるんだよ？」

ただひたすらに無邪気に、残酷に、そうカノヌシは答えた。ライフィセットの姿と声で。

「それってとつても幸せなことだよね？だからさお義兄ちゃんも一緒に行こうよ」

カノヌシはカインに手をさしのばしながら答えた。

カインは顔を俯きながら必死に歯を食い縛り、手にもつ聖剣を血が滲むまで握りしめていた。

「……村の皆を殺し、業魔に変え、ライフィセットを変え、ベルベットを傷つけ、あげくのはてに食べる？一緒に来い？何をいつているんだ？」

カインの体が光の粒子が包んでいき、聖剣も光を纏い始めた。

「お前たちは一体!!何をいつているんだ!!」

カインは思いきり地面を蹴り、カノヌシに向かつて剣を降り下ろした。

だがカノヌシに剣が当たる直前、急に悪寒がはしり、一瞬で後方へ下がり、上空に待避するが、空間から鎖が出現しカインの体に巻き付いてきた。

「つ！？これは・・・！」

「天の鎖、あらゆる者を縛り、力を封じ込めることができる」

見るとマーリンがやつたもののように、奴のいうとおり一切の力が出なかつた。聖剣も維持できず、すぐに手放してしまい消え去つてしまつた。

「くそつ！こんなもの！」

「無駄だ、それから逃れることはできん。すぐにこのままお前にふさわしい場所へ送つてやる」

すると背後から、黒い穴のようなものが浮かび上がり、そのまま穴の中へと引きずりこまれていこうとしていた。

「お前はこれから魔界ニブルヘイムへといざなわれる。永遠の闇をさ迷い続け、二度とこの世界の大地を踏みしめることはないだろう」

なんだと・・・ふざけるな・・・俺がいなくなつたら誰がベルを守つてやるんだ。なんとか鎖をとこうともがくが、鎖は解けず、それどころか力を失つていくばかりだつた。

「もう・・・お前とも会うことはないだろう」

アルトリウスはカインにそう告げながら、冷めた目で見つめていた。カインはそのアルトリウスの目に悔しさと怒りが込めあげて喉が焼けるほど叫んだ。

「くそっ!!くそっ!!くそがあああ!!!」

カインは氣を失っているベルベットに手を伸ばしながら悔し涙を浮かべていた。

「ちくしょおがあああああ!!!」

カインの体は闇の中に引きずりこまれてしまつた。

アルトリウス達はすぐにその穴へ背中を向け、その場を去ろうとすると—

ガアアンという鈍いおとが響き、振り向くとそこにはカインの姿があり、今なお鎖に抵抗していた。

「アーサー!!アルトリウス!!!」

カインはアルトリウスに、いやこの場にいる全員につげた。

「俺は必ずここへ戻つてくる!!この世界へ戻り、ベルベットを取り戻す!!!そして！必ずお前たちをぶつ飛ばす!!!」

カインは宣言をした、この場にいる者たちに。自分は必ず戻ると。愛する人を取り戻すと。自分たちを倒してみせると。高らかに宣言した。

「だからそれまで……待つていろ……！」

カインは人探し指を向けながら、そのまま闇の中へ消えていき、穴は完全に閉じた。

「ああ、待つているぞ。カイン」

その中の誰かがそう口にした。

第1章 閨の世界

11話

あの時から長い時間が経過していた。どれほどの時間が流れたのかはわからない。彼はこの闇の世界を今も歩き続けていた。元の世界へ戻る手掛かりを探しながら。

（何年……何十年……この世界をさまよっているのだろうか）

この世界には、何もなかつた。あるのは荒れ果てた大地と薄暗く輝く真つ赤な空、そこに住まう異形の化け物たち。

普通の人間なら数日もたたないうちに、気を保てなくなるような場所だつた。だがカインは耐え続けていた。

なぜカインはこの気が狂つてしまうような世界で正気を保ち、なお元の世界に帰ることだけを考え続けられるのか。

それは元の世界に残してきた未練が彼を突き動かしていた。

（それでも……俺は帰る……！必ずアイツがいる所へ……！）
彼は進み続ける。必ず帰るために。

彼が荒野を歩き続けていくと、その先に崖が見え、行き止まりかと思い崖の先の景色を見ると、信じられない光景がひろがっていた。

「……は・・・・・一体・・・・・？」

闇の世界に来てから、荒れ果てた荒野ばかりだったのに彼の目の前に広がっていたのは、廃墟になつた都市だつた。

「なんで、こんなものがこの世界に？」

カインは都市の様子を見ようと、崖から降りていつた。

都市にあつた建物はどれもボロボロになつていて、今にも崩れそ�だつたが、これほどの建造物は元の世界にも見られないほど立派なものだつた。

「かなりの年月がたつているな、少なくとも700年……いやもつとか？」

もしもここにライフィセットがいたら、喜んだだろうな。そんなことを考えていると周囲からいくつも気配を感じ、カインは聖剣を出現させた。

「また奴らか」

建物の影からいくつもの魔物が現れ、カインに襲いかかってきた。カインは特に焦る様子もなく聖剣を上空にいる魔物達に向けて構えた。するとカインの姿が魔物達の視界から消えると、魔物達の体がバラバラに切り裂かれていた。

「魔神瞬連斬」

魔物達は何が起こつたかわからぬままバラバラになつたまま地面に落ちていつた。そのまま地面に着地したカインは自分の持つてゐる聖剣をじつと眺めていた。

(この世界に来てからだいぶ力が上がつてきた気がする)

昔は術技を扱うだけで体力をもつていかれて、まともに力も使えなかつたのにいまじやまったく消耗を感じなくなつていた。

(あの時から……あの”緋の夜”から力が急激に強まつたんだ)

あの時のアルトリウス達との戦いだつて、かつての自分なら一方的に負けていたはずなのに、それなりに戦えていた。それがこの世界にきてからも力が上がつてきた感覚がする。

この力がようやく馴染んできたつてことなんだろうか

(いや、というよりは体が思い出してきたという感覚に近いか)

カインは自分の今の状態を確認しながら、廃墟になつた都市を調べていつた。もしかしたらこの都市に元の世界への手掛かりがあるかも知れない。

根拠は何もなかつたが今までこの世界をさ迷い続けて何一つなかつたのに、なぜこんな都市がこの世界にあるのかがどうしてもカインは気がかりだつた。

(もしも、この都市が俺と同じようにこの世界にやつてきたのなら、手掛かりの1つくらいあるかもしね)

調べてみる価値は十分にあつた。そうやつて廃墟を搜索しているとカインはあることにきがついた。

(おかしい……こんなにも広い都市だつたのに、ここに来るまで死体が1つも見当たらない)

骨の1つでもあつてもおかしくないと思つていたんだが住民が全員別の場所に移動したのか? それとも長い年月が経過して死体が風化してしまつたのか?

「考へても仕方がない、とにかくなにかさがしてみるか」

などと独り言をいいながら廃墟の搜索を再開した。

カインは魔物達を倒しながら廃墟を搜索しているとひときわ立派な神殿を見つけた。

他の建物とは違う感じがしたカインはその神殿に入つてみると、そこはとても広い空間がひろがつていた。天井は崩れて無くなつており、赤い月が中を照らし、神聖な場所のはずが何か悪いものに見えた。左右には神殿を支えるための柱が何本も立つていて、いちばん奥には銅像がそびえ立つていた。カインはそのまま神殿の奥まで歩いていき、その銅像を見上げ見てみると、それは戦士の銅像だつた。立派な兜をかぶり、大きな大剣を地面に突き立てていた。ここはこの戦士を祀つた神殿だつたんだろうか。

カインが銅像を見ていると背後から殺氣を感じ、咄嗟に横にかわすと巨大な尻尾がカインのいた場所に叩きつけられていた。

「いきなり不意打ちとは、やつてくれるな」

尻尾の正体を見てみると、巨大な大蛇がカインを今も食らいつくさんと睨んでいた。どうやらこの神殿は奴の巣だつたようだ。

「ヘビはもうこりこりなんだがな」

ヘビを見るなどしてでもあの時のことを思い出してしまった。カインは聖剣を携え、大蛇に向けて構えた。

大蛇は大きな咆哮をあげながらカインに向けて突つ込んできた。カインはなんなくそれを上空に飛んでかわし、大蛇の尻尾に向けて切つ先を向けた。

「鳳凰天驅！」

カインの体が炎を纏い、そのまま大蛇に向かつていつたが大蛇こちらを見ずにカインの攻撃をかわした。

「何!?」

大蛇がそのまま尻尾を振るうとカインは避けきれずに攻撃を食らい、柱に激突した。「いつてくそつ！」

咄嗟に剣でガードしたおかげで余りダメージはうけなかつた。大蛇は壁にめり込んでいるカインに向けて口から大きな火の玉を吹き出した。

「はあ!？」

カインはなんとなその攻撃をかわしたが、完全には避けきれなかつたようで、ただでさえボロボロの服が所々黒ずんでいた。

「ヘビが火を吹くってどういうことだよ!」

カインは大蛇への不条理を口にしながら剣を構えたが、再び大蛇はカインに向けて、火を吹いた。

「魔神剣!」

なんとか術技で相殺させたが、その時の勢いの爆煙で周りが見えなくなつてしまい、大蛇を見失つてしまつた。

「こんのつ!」

カインは煙をなくすために、聖剣を思いきり廻ぎ払うと煙は一瞬で無くなつたが、大蛇の姿は何処にもなかつた。

「何処に!?」

大蛇がいた場所を見てみると、大きな穴が空いており、どうやらそこに潜つたようだつた。カインは周囲を警戒しながら、剣を構えた。

(逃げた?いや・・・逃げるわけないか)

すると地中から上つてくる気配を感じたカインは咄嗟にそこから離れると、大蛇が勢いよく地面から口をあけながら上つてきた。

そしてそのまま再び地中に潜ると、またカインのいた場所から大蛇が現れた。カインはなんとかそれをかわし続けていたが、それもギリギリだつた。

「なんで!…こっちの居場所がわかるんだ!?

地中に潜つてゐる間はこちらの居場所は分からぬはず、ならどうして?

この時カインはアルトリウスとの修業を思い出していた。

「ピット器官？」

「ああ、ヘビは夜行性の生き物だからな。視力を補うためにその器官で獲物の熱を感じし、捕らえることができる」

「へえ、よく知ってるな、そんなこと」

「前にヘビの業魔と戦つたことがあつてな。その時調べたんだ」

「どうやって倒したんだ？」

「ヘビには熱を感知できることはさつきいつたな、ヘビの感知範囲は通常数十センチ離れたものを0・1℃単位で知ることができる。業魔になるとその精度も格段に上がつてくる」

アーサーはヘビの能力を説明しながら、カインの前に適当な石を2つ拾い地面に地面に並べた。

「例えばヘビに目隠ししたとする。仮にこの石の片方に熱がこもっており、もう片方は冷たい石だとする。ヘビはどちらに噛みつくと思う？」

「それは、熱がこもつてる方だろ？」

「そうだ、視界が見えなくともヘビは温かい方へ迷わず迷わずに食らいつくだろう。おまけにヘビはかなり素早くてな、攻撃をしようにも感知されてすぐにかわされてしまう」

「じゃあ、どうやつて……」

「そういうときこそ聖隸術を使う」

アーサーは両手をだし右手に火を、左手に氷を出した。

「火と氷の聖隸術を使って、辺りの温度を操作し、ヘビが混乱してゐるうちに倒したという
ことさ」

「なるほど、それなら感知もされないってことか」

「聖隸術は応用しだいで攻撃以外にも使うことができる。業魔との戦いでは特にな
「うん、でも俺まだ聖隸術はあまり得意じゃないからなあ」

アーサーがカインの肩をポンと手をおいた。

「そういうときこそ修業あるのみだ」

「うん！俺頑張るよ！義兄さん！」

(そう言えばそんなこと話してたな)

カインは昔アルトリウスにそう言われていたのを思い出していた。

「つて！俺聖隸術使えねえじやん！」

アルトリウスは昔聖隸術を使って倒したと言つていたが、俺には聖隸術どころか、聖隸が側にいないから話にならない。

「くそっ！どうすれば……！」

カインが頭を悩ませていると、ふと手に持つていた聖剣が目に入った。
「……熱がこもつているもの……そうか！」

カインはなにかおもいつくと、柱を足場がわりに蹴り、崩れた天井の屋根の上に上り下を見上げた。

するとカインは聖剣を思いきり地面に投げつけ突き刺した。

「聖剣と俺は繋がっている……なら！」

カインは聖剣に意識を集中させると、聖剣がどんどん熱を帯びていった。

そして、聖剣のあつた場所から再び大蛇が上り、聖剣を飲み込んでしまった。

「ヘビは熱に反応するんだろ？ なら、いつにも食らいついでくるだろ！」

カインはさらに聖剣に力を込めると、今度は大蛇の方がもがき苦しみだし、大きな尻尾をジタバタと暴れ始めた。

「そんなに熱いの大好きなら、存分に食らわせてやる！」

カインは天井から飛び降り、ヘビに向かつて突っ込んでいった。そしてすぐに聖剣を自身の手に戻し、その刀身が蒼い光を纏っていた。

「闇に還れ！ 龍虎滅牙斬！！」

大蛇を中心に魔方陣が出現し、カインが剣を大蛇に降り下ろした瞬間、何体もの龍が魔方陣から現れ、大蛇を飲み込んでいった。

大蛇はそのまま地面に倒れ、動かなくなつた。

カインは地面に着地し、倒れた大蛇をじっと見ていた。

「まさか、アーツの言葉を思い出すなんてな……」

今になつてアルトリウスの言葉を思い出したことに自分でも意外だと思つていた。

心の何処かではまだ奴のことを師と思う自分がいるのだろうか。

カインはもうここにはようはないと判断し、神殿から出ようと背を向けたが、その瞬

間、大蛇がガバツと起き上がりカインに食らいついてきた。

「こいつ!?まだ!?!」

カインは聖剣を出したが、僅かに反応が遅れ、大蛇に食われる寸前だつた。
(くそつ間に合わない!)

「ホーリージャッジメント」

食われるかと思つたその時、純白の柱が大蛇を包み、一瞬で大蛇は消滅した。

カインは一瞬何が起こつたかわからず、声が方へ振り向いて見ると、そこには男が
たつていた。茶色い古びたトレンチコートを着ており、下には白いシャツと黒いズボン
を着ていた。

「この世界で油断とは、すいぶん余裕だな」

「ア、アンタは?」

「私の名はカスティエル。光の天族カスティエルだ」

人間カインと天族カスティエル。それがこの二人の出会いの始まりだった。

12話

「…………！」

カインはすぐにその場から立ち上がり、目の前のカステイエルと名乗った男と距離をとり、剣を構えた。

「そう警戒しなくていい、私はお前の敵ではない」

そう言つて男は両手を上げて敵意が無いことを告げるがカインは警戒をとくことはしなかつた。

「これまでにも人の言葉を話す奴とは何度があつたが、そいつらは例外なく襲いかかってきたがな」

カインはこの世界に墮ちてから、人間に似たやつらとも出会つたが、やることは他の化け物たちと同じだつた。

二言目には殺すだのヒヤツハーだの物騒なことを言つてたな。

(そう言えばこいつは襲いかかつてこないな)

さつきも自分のことを助けてくれたようだし。

「やはりあの連中とも遭遇していたか」

「奴等のことをしつてているのか？」

「そのことについて知りたいのなら剣を下ろしてくれないか？」

「・・・・・」

カインは少し考えるとゆっくり剣を下ろした。

「信じてくれるのか？」

「ああ」

「何故だ？自分で言うのもなんだが、私のことを信じるための材料は全くないはずなんだがな」

「それは・・・・」

この男から発する気配はこれまで会つてきた魔物たちとは違ひ、どこか神秘的なものを感じていたからだ。

そう、まるで聖隸に近い気配だつた。

それにこの男とはどこか始めて会つた気がしないのだ。

どこか懐かしいような、ずっとずっと昔から知つているような。なんか気がした。

「勘だ」

「勘？・・・・そうか、勘か・・・フツ」

目の前の男——カステイエルは少し笑つた。

カインはそんなカステイエルの様子に眉を潜め、何を笑つてんだという表情をしていた。

「いや、すまない。それだけで私を信用するとは思わなくてね、つい」

「アンタが敵じやないつていつたんだろう」

「確かに」

カステイエルはカインに近づき右手を差し出した。

「改めて、カステイエルだ」

カインはカステイエルの手を握り返すと同じように名乗った。

「カインだ、よろしくカステイエル」

「そう言えば礼を言つていなかつたな」

「何がだ？」

カインとカステイエルは神殿を後にすると廃墟の町を歩いていた。カステイエルか

ら話を聞こうとしたカインだつたがカステイエルが場所を移すといつて、隠れ家まで案内してくれるそうだ。

「さつきヘビから助けてもらつたろ、ありがとな」

「気にするな、あれくらいどうということはない。そんなことよりついたぞ」

カステイエルは、瓦礫の山を聖隸術でどかすと下まで続く穴が見えた。どうやら地下が隠れ家のようだ。

「こつちだ」

カステイエルはそのまま下に入つていくと、カインもそのあとに続いていつた。カインが入ると後ろにあつた出口が瓦礫で塞がれていつた、カステイエルが聖隸術で閉じたようだ。カステイエルは手のひらに小さな光の玉をだし、それを明かりにしてそのまま奥へと続いた。

「ずいぶんと辛氣くさい隠れ家だな」

「外で野宿するよりはずつとましだ、それはお前もよく分かつてゐるだろう?」

確かにこの世界はそこらじゅう魔物だらけで、ろくに野宿も出来なかつたな。あの緋の夜から俺は死なない体になつた。正確には死んで始めて発動するものらしく、いつも死んでは生き返るの繰り返しでまさに生き地獄だつた。それに普通に腹もへるし、眠気もする。永いことこの世界にいるが、この体歳もとらないようだ。おまけにここには食

い物もろくなものがないし、おまけに睡眠不足ときた。正直もう体はボロボロだつた。

「まあ・・・・確かにな」

しばらく奥へと進むと広い空間に出た。

カステイエルがその空間に明かりを灯すと、どこか生活感のある場所だつた。
といつてもあるのは机や寝床があるくらいだつたが。

「ここに住んでるのか？」

「いや、ここにずっと住んでるわけじゃない。いざというときのためにあちこちに拠点
を構えてある」

まだ他にもこんな隠れ家があるのか。

までよ

「そんなにも拠点を作るとなるとかなり時間がかかるんじゃないのか？アンタ・・・
体いつからこの世界にいたんだ？」

カステイエルは少し考え込むと、やがて口を開きこう答えた。

「さあな・・・・もう一体どれくらいこの世界にきたのかはわからないが・・・・ざつと
見積もつても一萬年ぐらいか」

は？

いちまんねん？

何をいつてるんだこの男は

「アンタ……それマジでいつてるのか？」

「？ そうだが、何かおかしなことを言つたか？ 天族なら一万年くらい生きても不思議ではないだろう？」

カステイエルはまるで当たり前のようにそう答えた。

俺でさえそこそこ長くこの世界にいるが、正直かなり挫けそうなこともあつた。けど何とかここまで正気を保つてきたんだ。それなのに一万年だと？

天族——さつきもそんなことを言つていたが、どういう意味なんだろうか？ 天族とはそこまで長生きする種族なのか？ 一万年ものあいだずっと

「アンタ……凄いんだな。そんな長い間こんな世界で生き続けるなんて」「それは、お前も同じだろう」

「俺が？」

「お前もやりたいことがあるから、ここまでこれたのではないのか？」

そうだ——俺は必ず元の世界に帰つて、アイツに会いに行く。

その思いがあるから、ここまでこれた。

それは多分カステイエルも—
俺と同じか、それ以上の思いを秘めて—

「さて、とりあえず立ち話もなんだ、聞きたいことがあるんだろう?」

「……ああ、教えてくれこの世界のこと……そして元の世界の戻りかたを」
カステイエルは頷くと、カインに座るよう促すと、お互い机に向かい合うように、地面に座つた。

まず、カステイエルはこの世界に、ついて教えてくれた。この世界は魔界と言われる世界だという。ありとあらゆるもののが穢れに染まつており、普通の生き物がこの世界に墮ちれば、瞬く間に穢れに汚染され、異形の化け物——業魔と化してしまう。

今まで出会つた化け物たちは、その成れの果てだとカステイエルは言つた。

「なあカステイエル」

「なんだ?」

カインは説明するカステイエルにお構いなしに手を上げて質問した。

「その穢れってなんだ?」

「・・・・・・・・・・なに?」

カステイエルはまるで信じられないような表情をしながらカインを見た。

「いやだから穢れってなんだよ、聞いたことないんだけど。」

「…………まさか、情報の隠蔽？いや、だが」
カステイエルは手で口を覆うとなにか咳きながら、下に向いてしまった。

そんなにおかしなことを聞いただろうか？

「おーい、大丈夫か？」

「あ、ああ。すまない私としたことがつい取り乱した。まさか、現代の人間が穢れを知らないとは……」

「知らないとおかしいのか？」

「かつては常識だつたことだ。私が地上にいた頃は業魔といつた名称ではなかつたし
な」

カステイエルは穢れとはなんなのか一から教えてくれた。

「穢れとは人の心からでる負の感情そのものだ。迷いや怒り、悲しみ、そういうしたものに
囚われてしまうと人は業に憑りつかれた魔物——業魔となる」

そうなのか、知らなかつた。ならなんで今は誰も知らないんだ？

長い時がたつたせいで忘れられてしまつたんだろうか

にしてもそんな重大なこと遺跡や昔の書物に載つていてもいいはずなんだが――

それからも穢れについて詳しいことを色々教えてくれた、結論からいうと世界がおかしくしてしまったのは俺たち人間のせいだということだつた。

「この世界で俺が穢れないのは何故だ?」

「それは恐らくだが、その聖剣の加護のおかげだろう」

「こいつが?」

「それはあらゆる穢れ打ち払うと言われた伝説の聖剣の一つだ。それがあれば持ち主は穢れに汚染されることはない」

「ん? さてよこんな剣がまだ他にもあるのか?」

「ああ、それは私の時代に作られた剣でな、穢れを打ち払うために作られたものだ。何本かは人間たちに託したがそのあとは私にもわからない」

そうだったのか、この剣が穢れを打ち払う力か。カステイエルはもしかしたら俺の記憶についてなにか知っているのかもしれないが・・・今は元の世界に戻ることだけを考えることにした。

「なら、アンタはどうなんだ? 何故穢れないんだ?」

「私は・・・問題ない。元々そういう風に作られたからな」「作られた?」

「いや、今私の話はどうでもいい」

カステイエルは無理矢理話をそらした。聞いては不味かつたのだろうか。

「なあカステイエルのいう天族っていうのはもしかして聖隸のことをいつているのか？」

「聖隸？ ああ、それが今の私達の呼び名か」

「やつぱりそうなのか」

「ああその認識で間違いない。しかし……聖隸とはな。業魔という呼び名といい人間は皮肉な名をつける」

「？」

カステイエルは少し笑つてみせるとすぐに話を戻した。

「この世界には私達以外にも知性をもつたものがあるというのはしっているな」

カインはああといつて頷いた。確かにここにくる途中何度か人の言葉を話すやつとは会つた。けど、どいつもこいつもまともに話せる奴はいなかつた。最初は他にも人がいると喜んだけどな。

「奴等も業魔なのか？」

「いや、この世界の業魔は穢れが強すぎて意思を保つことができず、大体のものは理性をもつていかれる」

「なら奴等は一体？」

カインがそうきくとカステイエルは、忌々しそうな顔をしていた。彼にしては珍しく（といっても知り合つて間もないが）見せない表情だつた

「やつらは我等天族と対をなす存在……」

カステイエルはその重い口を開き、その名をくちにした。

「魔族と称される者たちだ」

魔族——彼らがカインにとつて深い因縁があることに、その時のカインは知るよしもなかつた。

13話

「……魔族、それが奴等の呼び名か」

カステイエルから魔族についての話によると、奴等はこの世界で生まれた存在であること。

地上の生物にとつては穢れは毒となるものだが、魔族にとつては有益なエネルギーとなるらしい。人間が穢れに染まれば染まるほど、奴等にとつては非常に都合のよい器として利用される。対魔師達も聖隸に自身を器として一つとなることで力を行使していくが、聖隸が対魔師の体を乗つ取るということはなかつたが、魔族たちのそれは全く逆のやり方だつた。魔族達は人間を単なる自分達の力を引き出すための器としてしか見ていいないという。

その性質ゆえに、大昔に人間と天族の両種族が魔族たちをこの魔界に追いやり、長い間幽閉されることになつたといふ。

「この世界にある廃墟は何なんだ、業魔がいるつてことは、魔族以外にも生き物がいたつてことだろ?」

「稀に、この世界に墮ちてくる者たちが来ることがある。あの廃墟も数百年も前に住民
ごと転位してきた」

カインが思つていた通りあの街も自分と同じようにここへ墮ちてきたようだ。
「あの街にいた人たちは……」

「……業魔になつたか、業魔になつた者たちに殺された」

カインの拳をぎゅっと握りしめ、表情を強ばらせた。

「……そとか」

その人たちもきっと無念だつたろう。訳も分からずに、理不尽に殺し、殺され、そしてその穢れが新たな業魔となる。そんな悪循環が続いていき、あの街は滅んだのだろう。

「……話を戻すぞ」

カステイエルがそう話しかけると、カインはゆっくりと頷いた。

「……ああ」

「さつき転位の話をしたが、これがこの世界から抜け出せる方法に繋がつている」

「!? 本当か！」

カインは腰かけていた地面から立ち上がりると、カステイエルが静止させるように、手のひらをこちらに向け落ち着くように促した。

「この世界は様々な世界と繋がっている。お前がいた世界以外にも他の世界の入口が存在しており、その入口もそれぞれランダムに閉じたり開いたりしている状態だ。だから何処にどの世界の入口が開くかはわからない」

「ならどうやつて元の世界に……」

「だが、一つだけ入口が開いた状態の場所が存在している」

「その入口は元の……俺のいた世界の入口なのか？」

「ああ、そうだ」

「なんで、断言できる？だれかいつて確認してきたのか？」

「……ああ、かつて一人だけ……な」

カステイエルは何かを懐かしむかのようにそう話した。

カインはそんなカステイエルの様子を見て、昔なにかあつたのかを聞こうとしたが、あまり踏み込みすぎるのはどうかと思ったのでそれ以上聞くのはやめた。

「ならさつさとその場所に——」

「だが、問題がある」

カインは今度はなんだよといった顔をしながら、カステイエルを睨んだが、カステイエルは構わず続けた。

「ひとつはその入口は人間と一緒にではなくては入れない、これはお前がいることでクリア

されたが、もうひとつ問題は、その入口を魔族達が管理しているというのはことだ」「魔族達が？ 奴等統率されてるのか？」

てつきり、魔族は業魔と大差ない存在だと思つていたが、どうやら自分が思つていた以上に厄介な存在らしい。

「その統率している魔族が、そこそこ面倒なやつでな。地上にいたころも何度奴と関わったか」

カステイエルが珍しく心底うんざりしたような顔になりながら話していた。めつたに表情を変えないような奴だと思っていたが、そんな奴をこんな嫌そうな顔にさせるとは、カインはその魔族の統率者に少し興味がわいた。

「どんな奴なんだ？ そいつ」

「かつて地上にいたころは、取引の王と呼ばれていた男だ」

「取引の王・・・・」

「その肩書きを聞いただけでもう面倒くさそうな奴だと、カインは察してしまった。
「奴の名はクラウリー、魔族一小賢しい男だ」

カインとカステイエルは隠れ家で一泊したあと、クラウリーのいる所へカステイエルが案内してくれることになった。

「何処にいるんだ？そのクラウリーってのは？俺も長い間この世界をさまつてがそんな場所みたことねえぞ」

「あの場所には特殊なルートへいかないとたどり着けないよう細工されてある。我々が使う術と同じような力を使ってな」

魔族達にも聖隸術みたいなのがあるのか。天族と対をなしていたら使えてもおかしくないか。

カインがカステイエル後ろをついていると、急に霧が濃くなってきており、視界が遮られていった。

「私のそばを離れるなよ」

「あ、ああ」

カインはカステイエルの姿を見失わないように、しつかり後ろについていった。

やがて霧が晴れていくと、目の前にはまさに王様が住んでいそうな大きな城がたつていた。外見は回りの淀んだ風景に似合わず、とても綺麗に整つており、まるで建てたば

かりのような感じがした城だった。

「ここか？」

「ああ……ここだ」

カステイエルが心底嫌そうな顔をして頷くと、城の中へ入つていき、カインもカステイエルに続いていった。

城の中にはまるで人の気配がなく、魔族どころか業魔もおらず、もぬけの殻となつていた。カインは本当にここが魔族の王様がいる場所なのか不安になつていたが。カステイエルのあの様子を見ていたら、信じるしかなかつた。

二人は大きな扉の前につき、その扉を開けると王の玉座が見えた。

「やつぱり誰もいない」

玉座には誰も座つておらず、やはりクラウリーとかいう魔族はいなかつた。

「いや、いる」

カステイエルはそう断言した。カインがカステイエルにどういうことかと問おうとすると—

「やあ、諸君」

背後から男性の声が響き、咄嗟にカインは聖剣で振り向き様に切り裂こうとしたがその刃は空を斬つてしまっていた。

「！いなーい！」

「いきなり斬ろうとするとは、物騒なことをする」

すると今度は玉座の方から声が聞こえ、振り向くとその男はまるで最初からそこにいたかのように、玉座に座つていた。その男は小太りの無精髭をはやした中年男性のような外見をしており、服は黒一色のスーツで黒いコートを見にまとっていた。カインの想像していた姿とちがつていたが、その雰囲気は常に余裕を感じさせ、その瞳には人を見透かしたような、目をしていた。

「久しぶりだな、会いたかつたぞ友よ」

「私がいつ貴様の友になつた」

二人の再開の挨拶をしている所へカインがかまわず前に出た。

「アンタがクラウリーか」

クラウリーはカインに目を向け、不適に口元を歪ませた。

「いかにも、俺が魔界を統べる王、クラウリーだ」

「あんたは、向こう側の世界の入口を管理していると聞いた」

「ああ、確かに俺が管理をしているが？」

「なら、俺を向こう側へー」

「だが断る」

「ああ!?」

カインが言い切る前にクラウリーは即座に断つた。カインはクラウリーのその態度に少し・・・いやかなりイラついたが、何とかこらえ問い合わせました。

「俺が地上でなんと呼ばれていたかカステイエルに聞いているだろう？俺は取引の王、俺は俺が得だと思ったことしかしない」

「くつ！この野郎・・・！」

カステイエルに聞いていたとおりやはり嫌な野郎だつた。カインは聖剣を出そとしたが、その時クラウリーが指を鳴らすと—

「!!」

カインの回りに魔族が取り囮み体中を剣で突きつけられていた。

(さつきのクラウリーが突然現れたことにしろ、こいつらにしろ、一体どうやつて…)

!?)

カインもこの世界に来てからかなりの修羅場を経験してきたはずなのに、こいつらには全く気配を感じることができなかつた。これも魔族の術によるものなんだろうか？「やめろ、クラウリー」

カインが動けずにいると、さつきまで動いていなかつたカステイエルが口を開いた。

「お前の取引を受ける、こちらもそのためにきた。」

「ほう、散々俺と取引するのを嫌がつていたというのに」

「こちらも本意ではないが、今はそれしかない」

「…………いいだろう、取引といこう」

クラウリーが部下に下がるよう、手をあげるとカインから離れ、再び姿を消した。
「では、クラウリーお前が得をする条件とはなんだ？」

「何、簡単なことだ」

クラウリーはカインに指を指しながら、告げた。

「その男の血がほしい」

「…………はあ！？」

取引条件はカインの生き血だつた。

14話

目の前にいるこの男はいきなり、血がほしいなんて物騒なことをいいだした。カインはいきなりの言葉に動搖を隠せなかつた。

「何故彼の血をほしがる？」

カスティエルは問いただすと、クラウリーはその問いに答えた。

「そいつは刻印を刻まれし者だろ？」

クラウリーはカインの方へ指差すと、そういった。

(刻印？ そう言えばアルトリウス達もそんなこといっていたな)

あの時の戦いで俺は確かに死んだ。だが俺の中にある何かが目覚め、生き返った。死ぬ前に受けた傷は完全に完治され、靈応力もかつてと比べ物にならないくらい上昇した。そのおかげでこの世界でも生きていた。

それが奴等のいう刻印と関係しているのか？

「ああ、よく知っているとも。その刻印こそが我ら魔族を封じているものだからな」

「！これが！」

「・・・・・」

カインは自分のなかにあるものが、魔族達を封じているものだということに驚いていたが、カステイエルはまるで知っていたかのよう無反応だった。

「刻印を刻まれたものは特別な因子を持つていてな、その因子こそ我らが欲するものだ」「貴様・・・また何か企んでいるな」

カステイエルはクラウリーがどういう男かを知っていたため何かしらろくでもないことを考えているということを察していた。

「当然だろう、俺は魔族だ。何か企んでいるのは当たり前だ、お前もそれは承知の上で取引を持ちかけてきたんだろう?」

「・・・・・・・・」

「どちらにしろ、お前たちは取引に応じるしかない」

カステイエルはしばらく考え込んでいたが、その時のカインがカステイエルの前に出て、自分の腕をクラウリーの方へ向けた。

「いいぜ、取れよ」

「!カイン!」

「ほう・・・・・」

カステイエルはカインの行動に焦りの顔をみせ、クラウリーは意外そうに笑った。

「大丈夫だつて、血くらい。別に命をとるつてわけじやないんだろう?」

「いや、だが、しかしだな」

「それに今はこいつに頼るしかないんだ。心配すんなよ、もしこいつが何かしようとしたらその時は倒せばいい」

カインは心配するなどカステイエルの肩を叩きながらそう笑いかけると、カステイエルも諦めたようでやれやれとため息をついた。

「…………相変わらずだな」

「ん?なんか言つたか?」

「いや、なんでもない」

クラウリーガパン!と両手で叩くと扉から何人かのメイドらしき人が入つてきた。

「さて、諸君。取引成立ということだな」

メイド達がカインの周りを取り囲むと、二人は警戒態勢をとり、身構えた。

「な、なんだ!?

「採血をとるために別の部屋へ案内する。ついでにその薄汚い服も着替えさせてやる。

ありがたく思え」

カインの両腕を掴まれるとそのまま玉座の間をあとにしていき、引きずられていつた。

「え？ ちょ！ まつ！」

ちよつと待て！ ！ という声を上げながらカインの姿は見えなくなってしまった。

「カイン！」

カステイエルはカインのあとを追いかけていこうとするが、クラウリーに肩を掴まれ阻まれてしまった。

「まあまで、奴なら大丈夫だ悪いようにはしない」

「信用できるか」

「そう邪険にするな、俺とお前の仲だろ？ それにお前には話もある」

「・・・・・」

カステイエルはクラウリーの手を振り払うと、カステイエルは少し距離をとり、クラウリーと向き合つた。

「奴は何も覚えていないのか？」

「・・・・・・・・・・・・ああ」

「そうか、やはり」

「カインが私と出会うまで魔族と何人かと戦つたと聞いたが・・・・あれはお前の差し金か？」

「まさか、奴がいると知ったのはこここの結界に入つたときだ、奴がこの世界に来ていたこ

とは知らなかつた」

クラウリーはわざとらしく、とぼけるとカステイエルはクラウリーを睨み付けるとそのまま背を向け部屋をあとにしようとした。

「奴に自分の記憶のこと教えてやらないのか?」

クラウリーはからかいまじりにそう告げた。

「時が来れば教える」

「ふつ・・・・・そうか」

「一ついつておくぞクラウリー」

カステイエルは顔だけをクラウリーに向けると、今まで見せたことのない顔でクラウリーを睨み付けるとそのまま警告した。

「彼に何かしてみろ、私がお前を殺すぞ」

「くつくつくつ・・・・怖い守護天使様だ」

クラウリーはまるで怯む様子もなくカステイエルに笑いかけた。

「心配しなくとも、今奴をどうこうしようと思つちやいない」

「・・・・・・・・」

カステイエルは再び前を向くと部屋をあとにしていった。

「やれやれ、腐れ縁は魔界に堕ちた後も変わらんか・・・・・因果だなカイン」

クラウリーは一人になつた玉座でそう呟いた。

（くそっ！何処にいるんだ）
カステイエルはカインを探しにそこらじゅうにある部屋を散策していた。

「ギヤアアアアアアアアアアアアアア!!」

すると何処からかカインの叫び声が聞こえてきて、カステイエルは急いで声のする方へ向かつた。

声のする部屋の前に立ち、そのドアを思いきり開くと――
「カイン！無事か――」

そこにはメイドを裸で押し倒すカインの姿があつた。

「…………邪魔をしたな」

「いやまでまでまでまで!!」

カインはドアを閉じようと/or>カステイエルを必死に引き留め、閉めようとするドアを掴んでいた。

「いや、すまない。ノックもしなかつた私が悪かつた、許してくれ」

「いや、カステイエルさん？なんかものすごい勘違いをしている、誤解だ」

すると先程のメイドが倒れ付しており、よよよと泣き崩れていた。

「うう・・・申し訳ありません、私はそのつもりはなかつたのですがカイン様が無理矢

理・・・・」

「いやいや、アンタも何いつてんの!?」

「カイン・・・まさかそこまで」

カステイエルが深刻そうな顔でこちらをみると、カインは頭を抱えた。

「頼むから話を聞いてくれ！」

ようやく事態が落ち着いた後、カステイエルは部屋へと入りカインの話を聞いていた。

どうやらカインは血を採られた後、メイドが着替えさせようとカインの服を掴み脱がせようしたらしい。それに、抵抗したカインは揉み合いになり、その拍子で服も破け、そのまま押し倒す形になつたというなんだかありがちなことになつたという。

「そうか、良かつた。私はてつきり……」

「そんなわけないだろう、全く。そもそも俺には心に決めた奴が……」
「申し訳ありません、私も少々悪ノリしてしまいました」

先程のメイドが謝罪してきたがその顔は全く悪いと思つていなか、顔をしていた。むしろまだ少し顔がにやけていた。

「アンタな・・・」

カインはメイドに何かいいたそうにしたが、はあとため息をつくとメイドに礼をいった。

「いや、ありがとな服やら食事まで用意してもらつて。えーと・・・」

「ルビーとお呼びください。カイン様」

「ルビー、ありがとう」

「いえ、お礼など私のような使用人一まして業魔などにお礼は不要でござります」

ルビーと名乗つたメイドは、カインに頭を下げるとそう告げた。

「君は業魔なのか」

「はい、200年ほど前にクラウリーア様に救つていただきそれ以来お仕えさせていただいております」

「あのクラウリーが君を救つただと?」

カステイエルはクラウリーが誰かを救つたという言葉が信じられず、怪訝な顔をした。確かに顔はかなり整つており、黒髪でボニーテールの髪形をしている美女だか、奴が見た目で拾うとは思えないでの大方気まぐれかこの少女に何かしらの特別な力があつたからそれを利用するためだろうと納得した。

「ここじゃあ、魔族と業魔の違いがよくわからなくなるな」

「どちらも基本穢れを持っているからな、見分けるのは難しいが、魔族は皆人の形だから全く分からぬわけではないな」

そうなのかとカインはカステイエルの話を聞いていた。

「そう言えばその服」

「うん？ ああ、これか？」

カインは立ち上がりと服をカステイエルに見せた。

青と白の服でフードのついたコートに黒いズボンに白色ブーツを見にまとっている。魔族の城にあつたにしては随分と綺麗な色をした服装だつた。

「あのクラウリ一って奴結構いい奴なんじやないのか」

「いや、あれがいい奴のはずがない。必ず何か裏がある」

「どんだけ信用してないんだよ、そう言えばカステイエルの服も用意してくれるとか言つてたぞ」

「断る」

「即答かよ、でもいつまでもその格好じやな」

カステイエルは長い旅のせいで、服もボロボロであちこち破れておりかなりひどい有り様だった。

「私はこの型の服以外着るつもりはない」

「そう言うと思ひカステイエル様の着てゐる服と同じ物をご用意しております」
ルビーはそう言うとその手には、カステイエルの着てゐるものと同じ服が折り畳んでいた。

「ぐつ・・・・・」

「意地はつていないで着たらどうだ?」

「では服はこちらに置いておきますので私はこれで」

「ああ、ありがとうルビー」

ルビーはお辞儀をするとそのまま部屋をあとにした。

「・・・・・やむを得んか」

カステイエルは置いてあつた服を掴み、何か術が仕掛けていないか調べておき、それから着替え始めた。

「なあカステイエル」

「なんだ?」

着替え終わったカステイエルは、カインの座っているベットの反対側に座り込んだ。

「なんでお前は俺にそこまでするんだ？」

「なんのことだ？」

「あのクラウリーとの取引はかなり危険があつたんだろう？場合によつては自分の命も取引材料にされる危険性もあつたはずだ。そしてこうして今も俺についてきてくれる、何故だ？」

「・・・・・あえていうなら・・・友との約束があつたからか」「約束？その約束と俺に着いてくれることと関係あるのか？」

カステイエルは何処か懐かしむような目をしながら、話をしてくれた。
「すまない、今はそのことは話せない。だが信じてほしい」

カステイエルはカインの目を見ながら、真髓に自分を信じてほしいと話した。カステイエルとは確かに会つて日も浅く、彼の全てを知つてゐるわけではない。だがカインはカステイエルのことを信じられた。勘でしかなかつたが、始めてあつた時から感じていた。彼は信じられると。

「信じているさ、信じているからここまできたんだろ？」

カインはカステイエルの肩に手をおき、そう告げた。

「感謝する、カイン」

「よせよ礼なんて、仲間なら当然だろう」

「仲間……そうか」

カステイエルは眼に涙を浮かべ、咄嗟に顔を伏せた。

「なんだ、お前泣いてんのか？」

「違う、これは眼にゴミが……」

「いや、わざとらしいな言い訳」

カステイエルは嬉しかつたのだ。長い長い間この世界をさ迷い、仲間も何もかも地上におききり、ずっと独り待ち続けた。そしてようやく出会えた待ち人に出逢い、そんな彼に仲間といわれたことがただ嬉しかつた。この一万年の放浪がようやく報われた気がしたのだ。

カインはカステイエルに手を差し出すと

「じゃあ、これからもよろしくなキヤス」

「・・・・・キヤス」

「ああ、カステイエルのキヤスだ。呼びやすいだろこのほうが」

「・・・・・そうだな」

カステイエルは差し出された手を握り、強い握手を交わした。

「よろしく頼む、カイン」

「ああ、頼りにしてるぜ」

二人は笑みを浮かべながら、誓いの言葉を交わした。

この時二人の絆はより強いものとなり、それが後に彼らの力になつていつた。

二人が部屋で休んでいると、ノックをされた音が聞こえ、外からクラウリー様がお呼びですという声が聞こえてきた。

「ようやくか」

「いこう」

二人はベットから立ち上がり、部屋をあとにした。

ルビーに案内をされ、ついた部屋はとても広い空間だつた。なに一つ物がない殺風景な部屋だつたが、その中心にはまるで空間に亀裂が入つたかのようなものがそこにあつた。

「あれが・・・」

「ああ」

彼方側の入口、それが彼らの前にあつた。すると背後から扉が開く音が響き、振り替

えるとクラウリーが入ってきた。

「やあ諸君」

「クラウリー」

「これが入口か？」

「そうだ、お望みのものだ。あの亀裂の中へ飛び込んで行けば元の世界へ帰れる」

「そうか、ようやく」

長かつた、本当に長い旅路だった—ようやくこれでベルの元までいける。

カインがこれまでの闇の世界での旅を振り返っているとカステイエルがカインの肩を叩いた。

「行こう、カイン」

「ああ」

カインは後ろにいるクラウリーに振り向くと、これまでのこととに礼をいった。

「世話になつた、ありがとう」

「魔族になつた、それに欲しいものは手にはいつたしな。取引の結果さ」

「・・・・・じやあな」

カインは再び前を向き、亀裂の中へ歩んでいった。

「旅の無事を祈つておるぞ」

「心にもないことを」

カステイエルはクラウリーの言葉に吐き捨てるようないい、一度と振り替えることなく、カインの後に続いていった。

「よし、準備はいいな？」

「いつでも」

二人はそのまま亀裂の中へ突っ込んでいき、目映い光の中へ消えていった。

「また会おう」

その時のクラウリーは不適な笑みを浮かべていた。

二人があの魔界からようやく脱出し、元の世界へ戻った二人が今現在いる所は――

地上の遙か上空から落下中だつた――

「うおおおおおおおおおお!!!」

カインは雄叫びを上げながら今まさに落ちていた。

「まさか、上空に繋がつていたとは思いもしなかつたな、このままでは地面に激突するまであと数分というところだな」

「なに冷静に分析してんの!?」

「落ち着けこんな時こそ冷静になれ、焦れば焦るほど何も出来なくなるぞ」

「いや、でも!」

「見てみろ、カイン」

カステイエルはおちながら、まっすぐ指を指し示した。

カインは指し示したほうへ顔を向けるとそこには――

「・・・・・すげえ」

とても美しい世界が広がつていた。太陽の光、輝く海、美しい森、どこまでも広がる

大地。

そこにはカインが今まで見たことのなかつた世界がどこまでもあつた。

「これが——世界！」

カインは感動を胸に抱き、今帰還を果たした。
愛する人の元へ帰るために――

第2章 地上世界ウエイスランド

15話

カインとカステイエルは現在ものすごい速度で地上に落下中――

(くそつ！どうする！俺はまだしもキャスが……！)

カインは刻印の呪いで一度死んでもすぐに復活するが、カステイエルの場合、この高さから落ちれば間違いなく死んでしまう。

「カイン！」

「なんだ!?」

「私に考えがある！」

カステイエルはそう言うと、自分の体を霊体化し、カインの体の中へ入った。

「！これは！」

すると、カインの体の中から力が流れ込んでくる感覚を感じた。カステイエルがカインに力を与えているようだ。

『私がお前の体を器として、力を送り込んでいる。その力で靈應力を聖剣に纏わせ、地上に向けて聖剣の力を放出させて落下スピードを抑え込めば……！』

頭の中に直接力ステイエルの声が聞こえてきた。かなりむちやくちゃな作戦だ。いくら靈応力を増幅させたとはいえ、そんなことで落下する衝撃を吸収しきれるのか?「できるのか!?そんなこと!?

「やるしかない」

このまま落ちれば力ステイエルにも間違いなくダメージが伝わる。そのショックで死ぬ可能性もある。

そう、力ステイエルが言うようにやるしかない。

「分かった!!」

聖剣を出現させ、その力を一気に開放させて刀身に纏わせていく。そして、自分の中にある力を全身全靈をもつて放つた。

「真・霸道滅封!!」

聖剣を地上へ向けて突くと、剣先からものすごいエネルギー波が放たれ、地面に衝突した。その勢いで少しずつ落下スピードが弱まっていったがカインの靈力もなくなりつつあつた。

「くそつーもつてくれ!」

そのままエネルギー波を放つていつたが、少しずつエネルギー波が消えていきそのまま地面に落下していつた。

「くそがつ！」

そのまま地面に叩きつけられてしまつたカインだつたがなんとか落下スピードは削れていたようで即死には至らなかつた。

「カイン！」

カステイエルはカインの体から出でてくるとすぐさまカインの元へ駆け寄つた。

「い、生きてるか？」

「ああ、なんとかな」

カステイエルはカインの体の中にいたので傷はおつていながらカインが重症だつた。落下スピードの全てを殺しきれなかつたようで体の骨がいくつか折れているようで内蔵のほうにもダメージがいつていていた。どうだつた。

「一度死んで全快にしたほうがいいかもな、ほら俺つて半分不死身みたいなもんだし」「バカなこというな、確かに重症だが聖隸術があれば応急処置ぐらいはできる」

カステイエルは聖隸術を使い、カインの体を治癒し始めた。

「ところで、ここはどこだ？」

「わからんが、近くに集落らしきものがあつた。そこで休ませてもらつたほうがいいだろう」

二人の現在いる場所はどこかの山頂付近だつた。辺りにはなにもなくそこからみえ

る景色は森や山々だつた。

「集落？そんなもんあつたか？」

「ここから少し北にある場所だ、落ちてる時に見えた」

カステイエルは治癒を終えると、手を差しのベカインはその手を掴まり立ち上がろうとしたが。

「いつ！」

体中に激痛がはしり、おもわずこけそうになるがカステイエルがカインの体をささえてくれた。

「な、治つたんじゃないのか？」

「いつただろ、あくまで応急処置だと。一旦休息をとつたほうが――」
カステイエルがいいかけたその時――

「ほお空から人が落ちてきよるとは、珍しいもんがみれたわい」

「!!」

声がしたほうをみると、そこにはキセルを携えた老人がたつていた。

「お前は・・・ゼンライ・・・か？」

「久しいのカステイエル」

「?なんだ、知り合いか？」

カスティエルは目の前の老人のことをしつて いるよう で二人の目はどこか懐かしい友達とあつたような目をして いた。

「私の・・・友だよ」

二人はゼンライと名乗る聖隸に自分達の集落まで案内してもらひそこで休ませてもらうことになつた。

「ここに住んでいるのは皆聖隸なのか？」

カインは周囲の人達を見渡すと、皆人間にはない雰囲気を感じ、ゼンライにそう訊ねた。

「どうじや、ここにいる物たちは皆、聖寮の対魔士から逃れてきたもの達じやよ」

「対魔士から逃れた？」

聖寮は人々を守るための組織だと聞いた。そんな彼らから何故逃げなければならな

いんだ?

「なにがあつた、ゼンライ」

「お主は長いことあちら側の世界にいたせいで今の世界がどうなつてゐるか知らぬの
だつたな」

「俺にも聞かせてくれ、爺さん」

カインもまたこちらの世界に帰つてきたばかりであれからどれくらいの時間がたつ
たのか、今世界がどうなつてゐるか、まったくわからぬ状態だつた
「ふむ・・・・よかろう、わしが知つてゐる範囲なら話してやる」

「そうか・・・・あれから3年しかたつていないのか」

集落の中にある家に移動した二人はそこでゼンライの話を聞いた。ゼンライの話に
よると、あの緋の夜から3年の月日が経過しており、長い間あの闇の世界にいたカイン
にとつてはとても短く感じた。

あの緋の夜以降人間の靈應力はさらに増幅され、全ての人間に聖隸が見えるよう

なつたという。あの日の出来事はアルトリウスが多数の聖隸を従え、業魔の脅威から人々を守つた日とされ、「救世主が降臨した」という意味を込め「降臨の日」と呼ばれているらしい。

それによつて対魔士も増え、聖寮も一気に勢力を増やし、国にとつても無視できないほど巨大な組織となつたという。

聖隸たちもまた、対魔士達に使役されることになり、聖寮に捕まつた聖隸は自我を封じられ道具のように扱われている。それでゼンライたちは追い詰められ隠れるように暮らし始めたらしい。

「同胞達が……！」
「キヤス……」

カステイエルは自分がいない間の世界の変わりようにショックを受けたのか、苦悶の表情でゼンライの話を聞いていた。

「我々は人間達を信じてこの地上に降り、人々に尽くしてきたはず……その挙げ句がこれか」

カステイエルは握つていた拳を血が滲むぐらいに握りしめていた。

「確かに人間達が我々に対する仕打ちは許されないことじや、しかしそれは悪意からのものではなく、純粹な善意——世界を救いたいという願いからくるものじや」

「だからといって、聖隸達を蔑ろにしていい理由にはならない」

カインは聖隸達のことは正直よく知らなかつた、知つてゐる聖隸もシアリーズかカステイエルくらいなものだけど、あの二人もここにいる聖隸達も道具のように扱われていはずがないと断言できた。

「カイン……」

「お主はカインというのか……」

「そういえば自己紹介がまだだつたな、俺はカイン、カイン・クラウ。よろしくゼンライの爺さん」

カインは右手を差し出しながら答えるとゼンライもそれに応じてくれた。

「わしはゼンライというもののじや、よろしくの若いの」

ゼンライは快くカインの手を握ると、じつとカインの目を見据えていた。

「？なんだ？俺の顔になんかついてるか？」

「真っ直ぐ迷いのないよい目をしておるな、お主は」

「え？」

「決して諦めず、自信の抱いた”夢”を必死に抱いておるな？」

「……」

目の前の老人はカインの心を見据えていた。カインは自分の心を覗かれているよう

な感覚に陥つたが不思議と気持ちの悪い感じはしなかつた。

「離すでないぞ、その”夢”を」

「・・・・ああ、分かつてるよ」

ゼンライは握つていた手を離すと、急に険しい顔になり立ち上がり、家から飛び出していつた。

「な、なんだ？」

「まさか」

一人もあとに続き家からると、強い衝撃が集落を襲つた。

「何物かがわしの領域に侵入しあつた」

「業魔か!?」

「いや違う！これは！」

ズドオオオン

衝撃はいまなお続き、集落の入り口から人の声がしてきた。

「私は聖寮から派遣された一等対魔士エレノア・ヒュームです!! 聖隸達よ！ 今すぐ降伏し、聖寮の下に降りなさい！」

それは業魔によるものではなく対魔士達による襲撃だつた